Osaka University Knowledge Archive

Title	『履軒古風』巻一翻刻･訳注（附巻二校勘記）
Author(s)	湯城, 吉信
Citation	懐徳堂研究. 2010, 1, p. 35-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24631
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『履軒古風』巻一翻刻・訳注（附巻二校勘記）

湯城吉信

現実の国では、いかに美しい幸福、快適な生活に恵まれても我々は常に重力の影響下に動いているにすぎず、たえずこの影響にうちかたなければならない。だが思想の国では、我々は物体ならざる精神であり、重力という必然の重みから免れる。そのため地上のいかなる幸福も、美しい豊かな精神が時をえて自らの中に見いだす幸福には比すべくもない。

―ショウペンハウエル「思索」（『読書について　他二篇』、岩波書店、一九八三、二〇頁）

『履軒古風』は中井履軒著の漢詩集である。全四巻。履軒は近体詩の規則を好まず、三十代以降、専ら古体詩を作った。『履軒古風』では製作年代順に作品が収録される。作品から確認できるおおまかな年代は以下のようである。

巻一　～明和三年（一七六六）【京都行まで】
巻二　明和三年（一七六六）～明和四年
　　【京都行前後の詩】
巻三　帰坂後～安永二年（一七七三）
巻四　年が確認できる詩：
　　甲辰（一七八四）、辛亥（一七九一）

この中、巻一と巻二とは、履軒の思いを表出した詩が多い点注目される（巻三、巻四は画賛が多い）。その他、老荘を題材にした詩は思想史上、（おそらく）キンケイを詠った詩は博物学史上、注目に値する。巻二は『洛汭奚囊』として別にまとめられており、筆者はすでに「『洛汭奚囊』―中井履軒の京都行」（『懐徳堂センター報』二〇〇四）として、その全文と訳注とを紹介した。本稿で

は、巻一の全文とその訳注とを紹介したい。巻一からは、京都に旅立つまでの履軒の思いを窺うことができる。

テキストは、懐徳堂文庫には、履軒手稿本の他、「懐93」のラベルのある写本が一冊あり、新田文庫にも二冊の写本が、北山文庫にも吉田鋭雄写だと思われる写本が一冊ある。新田文庫の一冊（E138）は巻二以降だけを収めるが、履軒の添削が見える手稿で、詩作の過程を窺うことができるので貴重である。もう一冊（E147）は巻四にも句点があるので読解の参考になる（手稿本では巻四は「会虞―観天地第一」以外は句点がない）。北山文庫にある北山写本は、文字は見やすいが誤字もあるので注意が必要である。

本稿では、手稿本を底本とし、適宜各テキスト参照した。翻字は、現代通用字に改めた。

先に述べたように、筆者は、巻二の内容をすでに「『洛汭奚囊』―中井履軒の京都行」（『懐徳堂センター報』二〇〇四）で紹介した。ただ、その後、手稿本『履軒古風』に先立つ履軒草稿だと思われる新田文庫本（E138）を発見した。『洛汭奚囊』と手稿本『履軒古風』巻二とでは若干出入があるが、新田文庫本『履軒古風』（E138）にはそれらすべての詩が見える。また、漢字を見せ消ちにして書き換えた箇所があり、推敲の跡を確認することができる。以上のことから、各テキストの前後関係は以下のようであると推測できる。

新田文庫本『履軒古風』（E138）（巻二の部分）
↓『洛汭奚囊』↓手稿本『履軒古風』巻二

そこで、本稿では、新田文庫本『履軒古風』（E138）（巻二の部分）中の『洛汭奚囊』との異同を紹介したい。なお、その作業の中で、拙稿「『洛汭奚囊』―中井履軒の京都行」における翻刻ミスを発見した。お詫びを申し上げ、合わせて挙げたい。

『履軒古風』

印「履軒圖書」、「懐徳堂圖書記」、「天生寄進」、「大阪大學圖書之印」、受入印「昭和29. 12. 22受入／104997」

序

履軒幽人喜誦古風詩賦、時而出之者、此篇是也。有類乎両漢之詞、有類乎唐人長短篇、若両漢巨賦、非其所好也。又有傚乎三百篇*、有傚于楚之騒*。幽人不喜魏晋六朝

之詩、尤不許陳思*之八斗*矣。然酷愛彭沢*之辞、而不能学也。擬而弗類焉者、亦或有之。及銘賛辞皆附焉、合而命之、曰履軒古風。其用韻独循古韻、断々乎弗奉休文*正朔*也。蓋汚之、其好古之癖不可医也。若斯、宜乎今人之弗吾韙。

履軒幽人自序「既雨既處*」「尚徳積載*」（印）

【注】○三百篇…『詩経』のこと。○楚之騒…楚の国の『離騒』。広く楚辞のことを言うと思われる。○陳思…曹植のこと。○八斗…謝霊運が曹植の才能を称えて、「天下才共一石、曹子建独得八斗、我得一斗」（天下の才 一石を共にし、曹子建 独り八斗を得、我 一斗を得）（『南史』謝霊運伝）と言ったことに基づく。○彭沢…陶淵明のこと。○休文…梁の沈約の字。沈約は、『四声譜』を著した音韻学の権威。○奉～正朔…「正朔を奉じる」で臣下になること。○「既雨既處」「尚徳積載」（印）…『周易』小畜の卦（上九）の「既雨既処、尚徳載」に基づく。履軒は、この文句を「既に雨ふりて既に処り、徳の載むを尚ぶ」と読み、「不遇な状況においても心安らかに居り、（表立った行動は取らずに）徳を積むことだけを尊ぶ」と解していたらしい。履軒の『周易雕題』には以下のように言う。「『処』、安居也。時可則出行、不可則不出。『既雨』、不可行之時也。故安居不出、便是徳積而未見於行事之時也。…往必遇害。君子唯脩徳於身、静以処之而已。君子在乱世棄富貴、独積徳於身者当此。…」。履軒の自己認識、生き方の覚悟を見ることができよう。

【書き下し文】

履軒幽人 喜びて古風詩賦を誦し、時にして出だす者、此の篇 是れなり。両漢の詞に類する有り、唐人の長短篇に類する有れども、両漢の巨賦の若きは、其の好む所に非ざるなり。又た三百篇に傚う有り、楚の騒に傚う有り。幽人 魏晋六朝の詩を喜ばず、尤も陳思の八斗を許さず。然くして彭沢の辞を酷愛するも、学ぶ能わざるなり。擬して焉に類せざる者、亦た或いは之 有り。銘賛辞に及ぶまで皆な焉に附し、合して之に命づけて、『履軒古風』と曰う。其の用韻は独り古韻に循い、断々乎として休文の正朔を奉ぜざるなり。蓋し之を汚さんとも、其の好古の癖 医すべからざるなり。斯くの若くんば、宜なるかな、今人の吾れを韙しとせざるは。

【訳】

履軒幽人は、古風な詩賦を詠み、折に触れて作ったものがこの篇である。〔その中には〕両漢の詞に類するも

のもあれば、唐人の長短篇に類するものもあるが、両漢の長編の賦のようなものは、その好むところではない。また『詩経』を模倣するものもあり、楚辞を模倣するものもある。幽人は魏晋六朝の詩を喜ばず、特に曹植の八斗の天才は認めない。そして陶淵明の辞を酷愛するが、学ぶことはできない。真似しようとして真似できなかったものもまたある。銘賛辞に及ぶまでみなここに附して、合わせてこれを名づけて『履軒古風』と言う。その用韻は専ら古韻に従い、断固として沈約には従わない。おそらくどのようにしても、その好古の癖は治すことはできないであろう。以上のようなので、今の人が私を良しとしないのは、もっともなことだ。

【参考】

履軒は、古韻を研究し、明和六年（一七六九）に『諧韻瑚璉』を、明和七年（一七七〇）に『履軒古韻』を著している。

巻一

*三十五歳に京都に行くまでの作品を収める。自らの生き方の模索が見える。

礼賦

*『荀子』の礼賦に異議を唱え、礼のすばらしさを織物に喩えて歌い上げた賦。

荀卿氏六賦、礼其一*也。其致意也遠、其厝辞也高。然要其帰、依然性悪善偽之説已*。余偶読焉、憮然久之、遂有是述、其辞曰、

荀卿氏が六賦、礼は其の一なり。其の致意や遠く、其の厝辞や高し。然れども其の帰を要するに、依然として性悪善偽の説のみ。余偶ま焉を読み、憮然たること之を久しくし、遂に是の述有り、其の辞に曰く、

崑崙之丘　崑崙の丘
霊蚕吐糸　霊蚕　糸を吐き
法天兮為経　天に法りて　経と為し
則地兮為緯　地に則りて　緯と為し
展之駕之　之を展べ　之を駕る。
造化之機　造化の機
載登載織　載ち登し　載ち織り
漢上之女子*　漢上の女子
其質太素　其の質　太素

上帝之衣
玄黄*絢之
維有陶唐氏*
嬀也継之
九文五采
姑伝婦承
至于鎬之姫*
織染之工
於斯大備
其縷三千
其綜三百
煌々済々
其文有郁
大君作被兮
煦万方赤子
姫氏老而*婦不良
機朽蠹兮霊蚕死
被百結*兮四出
赤子喁々兮莫之慰
彼卉之絮兮
亦可以為被
被之厖兮

上帝の衣
玄黄もて 之を絢る。
維に陶唐氏有り
嬀や之を継ぎ
九文五采
姑 伝え 婦 承く
鎬の姫に至り
織染の工
斯に於いて大いに備わる
其の縷 三千
其の綜 三百
煌々済々として
其の文 郁有り
大君 被を作り
万方の赤子を煦む。
姫氏老いて 婦 良からず
機 朽蠹し 霊蚕 死す。
被 百結して四出し
赤子喁々として之を慰む莫く
彼の卉の絮や
亦た以て被と為すべく
被の厖るるや

誰其為之
陶唐之裔兮
有漢之季
其采伊何
維紅曁紫*
豈謂不懿
不如霊被也
洵燠且美
自茲厥後
是続是似*
有弊有革
于今千祀
嗟乎霊蚕兮
終世不可覩
摭彼百結之餘
其何所徂
薄言褚之
以*待後之作者

誰か其れ之を為めん
陶唐の裔
有漢の季
其の采 伊れ何ぞや
維だ紅の紫に曁ぶも
豈に霊被に懿からず
如かずと謂わん
洵に燠として且つ美し
茲厥より後
是れ続ぎ是れ似ぎ
弊有り革有り
今において千祀
嗟乎 霊蚕や
終世 覩るべからず。
彼の百結の餘を摭いて
其れ何くにか徂く所ぞ
薄か言に褚し？
以て後の作者を待つ。

【校勘】○而…「兮」を上から直す。○之、以…「之、兮」を上から直す。

【注】○荀卿氏六賦、礼其一…『荀子』に「賦篇」があり、冒頭は礼の賦である。○依然性悪善偽之説已…礼の賦に「性不得則若禽獣、性得之則甚雅似者歟」とあることを言うのであろう。○漢上之女子…『詩経』周南、「漢広」に「漢上游女、無求思者」とあるのを参考にするか。○玄黄…『孟子』滕文公下篇に、王への礼物の布として登場する。○陶唐氏…太古の伝説上の帝王、堯のこと。儒教で理想の君主とされる。○嬀…堯と並び称される太古の伝説上の帝王、舜の姓。○鎬之姫…周王の姓は姫。鎬は、周の都の所在地。周代の文王、武王も理想の君主とされる。○百結…つぎはぎの服。『藝文類聚』巻六七所引王隠『晋書』「董威輩毎得残碎繒、輒結以為衣、号曰百結」など。○紅曁紫…『論語』陽貨篇に「悪紫之奪朱也（紫の朱を奪うを悪む）」という孔子の言葉が見える。古来、中国では朱が正式な色とされた。○是続是似…「似」も継ぐの意。『詩経』「良耜」に見える。

【訳】荀子の六つの賦の中、礼の賦はその一つである。その内容は深く、その表現は高邁である。だが、その帰着するところは、やはり性悪説にすぎない。私はたまたまこれを読んで、しばらく憮然としてしまい、やがてこの文章をしたためることになった。その言葉に言う。

崑崙の丘で霊妙なる蚕が糸を吐き、天に則って縦糸とし、地に則って横糸とし、これを操った。造化の織機にのぼしては織り上げていき、漢水のほとりの神女は汚れなき性質を持ち、上帝の衣は〔天地の色である〕黒と黄とで飾られた。ここに、堯が登場し、舜がそれを継ぎ、すばらしき文が織りなされ、それを姑が伝え、婦人が承けた。姫氏（周王朝）に至って、織物の技術はたいそう完成した。その布は種類も多く、煌々と美しき模様があり、大君は布団を作って、世界中の赤子を育んだ。姫氏（周王朝）が衰えて、婦人は良くなく、織機は朽ち、霊妙なる蚕も死んだ。布団はつぎはぎの物が様々出現し、赤子はギャーギャーと〔泣き〕慰められず、木綿で布団も作れるが、乱れた布団は、誰がよくそれをおさめよう。堯の末裔、漢末には、この綾はどのようになったであろう。紅が紫に混じった（正式な色が失われた）が、霊妙なる布団に比べてあながち悪いわけでもない。まことに暖かくかつ美しい。その後、継承されたり壊されたり革められたりしつつ、今に至るまで千年、ああ、霊妙なる蚕は、ついぞ見ることはできなかった。あのつぎはぎの遺物を拾って、さてどのようにすればよいのか。とりあえず、ここに記して後世の作者を待ちたい。

将棋引

＊将棋の対局を活写する。引は楽府体の詩。

方地瓜分垠封疆　方地　瓜分し　封疆を垠り
中天星墜殺気揚　中天　星墜ち　殺気揚がる。
閫外*秋令元有寄　閫外の秋令　元　寄り有り
桂殿春芳擁玉皇　桂殿の春芳　玉皇を擁す。
六師死命仰鉞旄　六師死命　鉞旄を仰ぎ
千里成筭下廟廊　千里成筭　廟廊を下る。
歩卒九道先啓行　歩卒　九道　先に行を啓き
令厳部伍森成行　令厳たる部伍　森として行を成す。
前徒知進不知退　前徒　進むを知りて　退くを知らず
五伐七伐声鏘々　五伐　七伐　声鏘々たり。
威名元伝漢飛将*　威名　元　漢飛将と伝え
意気縦横不可当　意気　縦横たりて当たるべからず。
軽車衝墉多轗軻　軽車　墉に衝たりて　轗軻多く
驕馬遭歩或玄黄*　驕馬　歩に遭い　玄黄に或う。
更把生虜補卒乗　更に生虜を把りて　卒乗を補い
遂鼓死士奪塹隍　遂に死士を鼓して　塹隍を奪う。

従軍有賞皆金印　従軍　賞有り　皆金印
幕府策勲拝龍章　幕府　勲を策して龍章を拝す。

金将本来数奇者　金将　本来　数奇なる者にして
血戦功就独相忘　血戦　功就り　独り相忘わる
不見夫差心益驕　見ずや　夫差の心　益々驕りて
豈料勾践胆日嘗　豈に料らんや　勾践　胆を日々嘗むるを。
虎賁釈厳冠伺釁　虎賁　厳を釈き　冠　釁を伺い
将軍在外邦無良　将軍　外に在りて　邦に良無し。
疾雷一声不掩耳　疾雷一声　耳を掩わず
車馬衝虚忽翺翔*　車馬　虚を衝かれ忽ち翺翔す。
金銀棄擲徒資敵　金銀棄擲し　徒らに敵を資け
四面重囲災剥床　四面重囲され　災い床を剥ぐ。
禁垣車馬接踵没　禁垣の車馬　踵を接して没し
勤王旌旗引領望　勤王の旌旗　領を引きて望まる。
且躋且長遡洄道　且つ躋り且つ長く　洄道を遡り
不遂不退触藩羊*　遂まず退かず　藩に触るる羊。
白虹*竟天謫何*在　白虹天に竟り　謫　何くにか在らん
非王是将非将王　王に非ず是れ将にあり　将王に非ず。？
股肱移禍*雖已矣　股肱に禍を移すこと已われりと雖も
天殃寧知弗可攘　天殃　寧んぞ攘うべからざるを知らん。
左将孤軍天一角　左将　孤軍　天一角
斜指斜突気激昂　斜めに指し斜めに突き　気激昂す。
一木胡能支崩厦　一木　胡ぞ能く崩厦を支えん
櫬璧便見哭道傍　櫬璧　便ち見る　道傍に哭するを。

鬪蝸自古夢一覚　鬪蝸 古より夢一たび覚むれば
留与閑人鑒興亡　留めて閑人と興亡を鑒(かんが)む。
寄語多少青衿子　寄語す 多少の青衿子よ
莫動機心徒自荒　機心を動かして徒らに自ら荒むこと
　莫(な)かれ、と。

詩中所序棊勢、往々凡庸敗局、非高手須有、所謂簾下店頭手段矣。亦只為吾輩人言、非為高手謀也。
詩中序(の)ぶる所の棊勢、往々にして凡庸敗局、高手須(すべから)く有るべきに非ざるなり。所謂簾下店頭手段なり。亦た只だ吾輩の人の為に言うのみに、高手の為に謀るに非ざるなり。

【校勘】○何…「安」の上に「何」と書く。

【注】○閫外…域外の意。転じて出征軍。○漢飛…将漢の李広が匈奴からこう呼ばれた。○玄黄…この場合、馬の病。黒毛の馬が黄色になるからと言う。○翺翔…さまようこと。○触藩羊…『周易』大壮の卦（上六）に「羝羊触藩、不能退、不能遂、无攸利」（羝羊 藩(まがき)に触れ、退く能わず、遂む能わず、利する攸(ところ)无(な)し）とある。行き場を失うこと。○白虹…兵の象。「白虹貫日（太陽を貫く）」で君に危害を加える象。『史記』などに見える。○股肱移禍…『史記』楚世家に、昭王が病気になった際、その禍を将相に移すことができるという太史の言に対して、昭王が「将相、孤之股肱也。今移禍、庸去是身乎」（彼らは私の体の一部だ。彼らに禍を移しても我が身から禍が去ったことにはならない）と言ったことに基づく。○簾下店頭手段…縁台将棋のへぼ将棋という意味であろう。

【訳】升目に国境を分かち、中空を星が落ち殺気がただよう。都城の外では軍隊が舎りに落ち着き、宮殿では春の草が皇帝を取り囲んでいた（最初の整った駒の配置を言う）。天子の軍隊は命を受け武器や旗飾りを取り、千里に作戦を巡らし朝廷を辞した。歩卒（歩）は全国の道路（九つの目）に先鋒となり、厳格たる部隊は並び行進する。前方の卒（歩）はひたすら前進し後退することを知らず、声を上げながらひたすらに斬りかかる。威名はもと漢の飛将軍と賞され、意気盛んに防ぐことができない。軽い車（香車）は、城壁にぶつかると行きなずみ、驕れる馬（桂馬）は歩卒に遭うと窮地に陥る（「桂の高飛び歩の餌食」を言うのであろう）。捕虜を生け捕りにして我が兵力を補い、遂に志士を鼓舞して敵の陣地を奪う。従軍に賞あるのはすべて金印で（金に成ること）、幕府で功名を称揚するのに龍の文様を拝む（龍に成ること）。金将は元来不幸者で、血戦で功名を遂げれば忘れられてしま

う。ご覧あれ、夫差の心はますます驕り高ぶり、勾践が胆を嘗めて復讐を誓っているのを知るよしもない。精鋭軍も厳重な守りを緩め、敵が隙を窺う。将軍は出払い、国に優れた部下もなく、急襲されて防ぐ暇もない。車馬は虚を突かれ逃げまどう。金や銀を捨ててひたすら敵を助け（敵の駒になること）、四面を包囲され、災禍は寝室にまで迫る。宮廷の車馬は次々となくなり、勤王の旗印を首を長くして待つ。くねくねと長い道を逃げ回り、前進も後退もできず、行き止まりにぶち当たる。白い虹が天をわたり、罪は誰にあるかと議論し、王か将軍かと取り沙汰す。？〔昭王と違って〕股肱の臣下にも禍を移したが、天罰はどうにも払いのけることができない。左の将軍（角のこと）は天の一角で孤軍奮闘し、斜めに指し斜めに突撃し、意気盛んだ。〔だが〕一本の木では崩れゆく建物を支えることはできない。棺を道端に泣き叫ぶのを見、蝸牛角上で争った蝸牛が夢から覚めれば、〔盤をそのまま〕留めて暇人が攻防を云々する。若者諸君よ、巧詐の心を労して自らを損なうことのないように。

詩の中で描写したのは、凡庸な負け将棋で、上手な人の手ではない。いわゆる縁台将棋のへぼ将棋というやつである。また私のような輩のために言っただけで、上手な人のために言ったものではない。

秋夜独坐

＊秋の夜に時間の過ぎゆくのを嘆く詩。

独有流年感　独り流年の感有り
挑燈坐三更　燈を挑げて三更に坐す。
疎簾挂落*月　疎簾に斜月挂かり
寒蛩悲中庭　寒蛩（きょう）中庭に悲しむ。
木葉知落尽　木葉落ち尽くすを知れるは
此夕減秋声　此の夕べ秋声減じればなり。

【校勘】○落…「斜」の上に「落」と書いている。

【訳】独り月日の過ぎ去るのを感じ、灯りをかいて真夜中に座る。疎らな簾に傾いた月が懸かり、晩秋のコオロギは中庭で悲しんでいる。木の葉はすっかり散ったらしい、今晩は木の葉の音が聞こえにくくなったから。

樵者

＊樵が自然にとけ込んで、無心の境地に達しているがごとき状況を詠う詩。竹山『篁陰集（詩集）』巻一（影印本二六六頁）に「樵

者」と題する詩が、巻二（影印本二八〇頁）に、「雪中樵夫」（『和歌新題百首詩』）と題する詩がある。いずれも題詠であろう。

与木石居鹿豕遊　木石と居り　鹿を豕（お）いて遊ぶ
不知孰是忘機*者　知らず　孰（たれ）か是れ機を忘るる者なるかを
無端斧斤動雲根*　端（はし）無く　斧斤を雲根に動かせば
一雨満山霜葉下　満山に一雨ふり　霜葉下る

【注】○忘機…機心（巧詐の心）を忘れる。○雲根…山の高所を言う。

【訳】木や石といて、鹿を追って遊ぶ。
（この中）誰が巧詐の心を忘れる者なのであろうか。
無心に斧を雲の根に振るうと、満山に一雨降り、紅葉が落ちる。

寓燭閨情（燭に閨情を寓す）

*閨情は閨（ねや）での情。

空房復何有　空房　復（ま）た何か有らん
孤燭思難裁　孤燭　思い裁ち難し。
滴尽千行涙　千行の涙を滴（したた）り尽くし
丹心亦作灰　丹心　亦た灰と作（な）る。

【訳】人気のない部屋には他に何もない。一本の灯りの思いはたち（「（芯を）裁つ（かく）」に「（未練を）断つ」を掛ける）がたい。千筋もの涙を流し尽くし（「蝋が流れる」ことと「涙を流す」ことを掛ける）、赤い心（「赤い芯」に「真心」を掛ける）はまた灰となる。

墨水咏、倣関東体（墨水咏、関東体に倣う）

*墨水は隅田川の漢名。関東体は未詳。

西岸下武陵　西岸　武陵を下り
東岸上総州　東岸　総州に上る。
岸々秋一色　岸々は　秋一色に
凄風満客舟　凄風　客舟に満つ。

其二

王孫昔此遊*　王孫　昔　此（ここ）に遊び
芳草年々緑　芳草　年々　緑なり。
于今白鳥飛　今において　白鳥飛び
京客労心曲*　京客　心曲を労す。

【注】○王孫昔此遊…『楚辞』「招隠士」の「王孫遊兮不帰、春草生兮萋萋」を意識するか。○京客労心曲…心曲は、心のくま、心中。『伊勢物語』第九段「東下り」で、京から「隅田川」に来た男が都鳥（ユリカモメ）を見て郷愁に襲われるという有名な話に基づく。

【訳】西岸は江戸に下り、東岸は上総に上る。両岸は秋一色に寒風は客船に満ちる。

（その二）貴族の子弟は昔、ここで遊んだが、芳しい草は毎年緑色に茂っている。今は白鳥が飛び、京都の客は心を悩ませる。

班婕妤

＊班婕妤（はんしょうよ）は、漢の武帝の寵愛を得た美人。後、寵愛を失い、自らを秋の扇に喩えて、「怨歌行」という歌を作った。

廟廊正色士　廟廊 正色の士
内宴召来不　内宴 召し来たるやいなや。
一自辞同輦＊　一たび自ら輦を同じくするを辞すれば
棄扇不待秋　棄扇 秋を待たず。

【注】○同輦…『蒙求』に、成帝が、後庭に遊んだ際、同じ輦（車）に乗ろうと班婕妤を誘うと、「古の聖賢はそのようなことはしませんでした」と断った話がある（「班女辞輦」）。

【訳】朝廷のまじめな士（？）が宮廷での宴会に招くかどうか。

ひとたび同じ輿に乗ることを拒否したばかりに、扇は秋を待つまでもなく捨てられた。

怨詞

＊女性の怨みを詠った閨怨詩。題詠であろう。

妾如弓上絃　妾は弓上の絃の如く
君如絃下弓　君は絃下の弓の如し。
絃懸合縄墨　絃懸かりて縄墨に合うも
弓体不可窮　弓体 窮むべからず。

【訳】私は弓の上の弦のようで、あなたは弦の下の弓のようです。

弦は規則に従いますが、曲がった弓の体はどうしようもありません。

老子

＊道家の祖として有名な老子を詠った詩。履軒は老荘について一家言を有していた（拙稿「中井履軒の老荘観」（『中国研究集刊』四六号、大阪大学中国学会、二〇〇八年）参照）。

退歩吾不做　　退歩して吾れは做さず
説雌*更禁人　　雌を説きて更に人に禁ず。
恝視*天下溺　　天下の溺るるを恝（かい）視するも
百年営此身*　　百年　此の身を営む。

【注】○雌…履軒は老子の道を「雌道」だと言った。雌道とは、消極的で卑怯な方法を言う（拙稿「中井履軒の老荘観」（『中国研究集刊』四六号、大阪大学中国学会、二〇〇八年）参照。○恝視…恝（カイ、カツ）は、憂える、心配のない様など相反する意味を持つが、ここでは「介」に通じ、気にする意ととらえた。○百年営此身…老子が長生きしたという言い伝えを踏んでの発言であろう。履軒は老子を養生術の祖と見ないが、一般的伝承に従ったのであろう。『史記』老子列伝「蓋老子百有六十餘歳。或言二百餘歳。以其修道而養寿也。」履軒『老子雕題』二八（五九　治人事天章）「…与養生無干渉。…老聃元無仙術。謬為道家之祖、受誣太甚。」

【訳】退歩して自分は何もしないばかりか、消極的なやり方を説いて、人にあれこれするなと言う。世の中の人が耽溺していると文句を言いつつ、自分は養生に励んでいる。

【参考】
『奠陰集（詩集）』巻二（影印本二八一頁）に竹山作「老子」詩があり（蘭洲「和歌新題」に題を取った竹山「和歌新題百詩」）、「青牛蓬累日、何物候真人、関上奪朱気、釀成胡羯塵」と詠う。

独興　在馬山作（馬山に在りての作）

＊馬山は有馬山。履軒の師五井蘭州は、宝暦九年（一七六〇）に中風の湯治に有馬に行った。その際、履軒も供した（西村天囚『懐徳堂考』上　五一頁）。これはその際の作品であろう（蘭洲の作品は『蘭洲遺稿』に見える）。有馬へは懐徳堂関係者はたびたび訪れたらしく、履軒の弟子竹島簣山も「馬山紀行」を残している。

行到樺*樹下　　行きて樺（さくら）の樹の下に到り
掃石坐泉声　　石を掃きて泉声に坐す。
無風葉*自墜　　風無くして葉自ら墜ち
時聴魚子鳴　　時に魚子の鳴くを聴く。

【校勘】○樺…手稿本は「樺」を墨で消す。ラベル「懐93」の写本は「霜」に作る。○葉…墨で消す。

【注】○樺…履軒はサクラに樺の字を当てた（履軒著『画觸』に詳しい説明が見える）。

【訳】歩いていってサクラの木に到り、石を掃き清めてせせらぎの音を聴きながら座る。風がないのに葉は自然と落ち、時々、魚の子が鳴くのが聞こえる（？）。

蠹魚

＊自分を蠹魚（シミ虫）に擬えた詩。

此魚不躍淵　　此の魚 淵に躍らず
老死在陳編　　老死すること陳編に在り。
男児七尺躯＊　男児 七尺の躯
偏与爾相憐　　偏えに爾と相い憐れむ。

【注】○七尺躯…陸雲詩に多く見える。

【訳】この魚（シミは漢字で書くと蠹魚）は淵で飛び跳ねず、古書の中で老いて死ぬ。七尺の身を持つ男児でありながら、ひたすらお前と（同じ境遇を）憐れみ合う。

聚頭扇

＊扇子のこと。

破輪用陽数＊　　破輪 陽数を用ゆ
三分三十輻＊　　三十の輻を三分し
楮輞＊飛生風　　楮輞 飛びて風を生じ
一駕＊解熇々＊　　一駕 熇々たるを解く

【注】○陽数…奇数。（扇子の骨の数は奇数だった？）○三十輻…車輪の矢の数は三十と決まっていた（『老子』十一章「三十輻共一轂」を参照）。○輞…大輪。車輪の回りのたが。○駕…乗り物。○熇々…盛んな様。

【訳】破れた車輪（＊扇子を喩える）は奇数を使う。三十の矢を三分し（＊扇子はおよそ百二十度なので、三百六十度の三分の一）、紙の車輪が飛んで風を起こし、一台の乗り物が炎暑を払う。

舟行雑詩　網干在龍野西南三里許
（網干は龍野西南三里許（ばかり）に在り）

＊龍野は中井家の出身地であり、履軒・竹山兄弟も何度も訪れている（履軒著『昔の旅』を参照されたい）。この詩は、懐徳堂文庫所蔵の「竹山・履軒諸先生張交（はりまぜ）」と題箋の張られた屏風に「舟行雑詠」として見え、題辞の下に「賦昔遊寄播中兄弟」とある（末尾に「履軒幽人」の署名と「完」「履軒幽人」の印あり）。若干の違いについては、【注】ならびに【参考】に示した。

山城平旦気　正与猿鶴*似
結伴出郭門　即便伊川沚

山城　旦の気
正に猿鶴と似たり。
結伴して郭門を出れば
即ち便ち伊川の沚（ほとり）。

其二

行々長堤草　草短鞋底柔
行々且莫亟　将喚下灘舟

行き行く長堤の草
草短くして鞋底に柔し。
行き行き且くは亟（いそ）ぐ莫（な）かれ
将に下灘の舟を喚ばんとす。

其三

日出東岑上　未消一川烟
烟際頻回首　棹声不見船

日は東の岑（みね）の上に出
未だ一川の烟消えず。
烟の際に頻りに首を回（めぐら）せども
棹声（のみにして）船を見ず。

其四

烟破棹影来　載薪霜未乾
嗟来将一酔　載我到網干

烟は棹の影を破りて来たり
薪を載せて霜　未だ乾かず。
嗟（さあ）来、将に一酔せんとするに
我を載せて網干に到る。

其五

篙人顧我笑　転棹舟成巴
低歌無答語　艤舟在晴砂

篙人（こうじん）　我を顧みて笑い
棹を転じて　舟　巴を成す。
低く歌いて答語無く
舟を艤（つ）くること晴砂に在り。

其六

同人一椀酒　探嚢*各準還
買得長江水　両岸三里山*

同人　一椀の酒
嚢（ふくろ）を探り各々還（まわ）すを準（はか）る。
長江の水を買い得て？
両岸　三里の山。

其七

烟波一條路*
鬱靄*穿得開
右山每牆面*
左山遠徘徊

烟波　一條の路
鬱靄　穿ち開き得たり。
右の山は　毎に牆に面し
左の山は　遠く徘徊す。

其八

急流半篙水
山々一様春
山鳥啼送舟
山花笑迎人

急流　半篙の水
山々　一様に春なり。
山鳥　啼きて舟を送り
山花　笑いて人を迎う。

其九

舟繞山趾過
山背舟行走
山容看不足
双眸每在後

舟は山趾を繞りて過ぎ
山は舟行に背きて走ぐ。
山容は看れども足りず
双眸は毎に後ろに在り。

其十

水浅鑑人面
魚在菱花中
投食莫猜鈎
機心我已空

水は浅くして人面を鑑し
魚は菱花の中に在り。
食を投ぐるも鈎を猜う莫かれ
機心　我れ已に空し。

其十一

時々過浅瀬
憂々船有声
船底薄如紙
能摘砂石行

時々浅瀬を過ぎ
憂々と船　声有り。
船底薄きこと紙の如し
能く砂石を摘ちて行く。

其十二

春水能送舟
春風不労帆
咄嗟長干尽
網干竹樹厳

春の水は能く舟を送り
春の風は帆を労せず。
咄嗟に長干尽き
網干　竹樹　厳たり。

【注】○猿鶴…戦死者の霊を言う。『太平御覧』巻八五皇王部、巻八八八妖異部四「変化下」、巻九一六羽族部「鶴」「『抱朴子』曰、周穆王南征、一軍尽化、君子為猿為鶴、小人為虫為沙」とある。○探嚢…ここでは「探籌」（くじを引くこと）と解した。○買得長江水、両岸三里山…李白「早発白帝城」「朝辞白帝彩雲間、千里江陵一日還、両岸猿声啼不住、軽舟已過万重山」の「両岸」「千里」を意識するものか。○路…「竹山・履軒諸先生張交（は

りまぜ)」では「道」に作る。○劈靄「竹山・履軒諸先生張交(はりまぜ)」では「欵乃」に作る。○牆面…『論語』陽貨篇に、見通しが利かないことを言う表現として見える。履軒は『論語雕題』で、「面、虚字、猶向也。牆面、面於牆也」と雕題を付けている(『小学雕題』でも同様)。

【訳】

(その一)
山城の夜明けの気配は、ちょうど〔死人が化したという〕猿や鶴のようだ(＊注参照)。
伴とともに城門を出れば、すぐに揖保川のほとりに出る。

(その二)
長い堤を歩いて行けば、草は短く草鞋の底に柔らかである。
まあ、慌てるなさるな、今、川下りの舟を呼びますから。

(その三)
日は東の峰の上に出、川一面の靄はまだ晴れない。
靄の際をしきりに見回してみるが、棹の音だけで舟は見えない。

(その四)
靄を破って棹の影が現れ、薪を載せて、霜はまだ乾いていない。
さあ、一酔いしようかと思いきや、私を乗せてもう網干に着いた。

(その五)
船頭は私を見て笑い、棹を回して船が旋回する。
低く歌って答えることもせず、舟を晴れた砂浜に着ける。

(その六)
同人が一椀の酒をくじ引きで飲む順番を決める。
長江下りを買った気分で、両岸には三里の山が続く。?

(その七)
水面の一筋の路がたちこめた靄を開いて進む。
右の山は絶壁に面し〔たように迫り〕、左の山は遠くにある。

(その八)
急流は棹半分ぐらいの深さがあり、山は春の色でいっぱいである。
山鳥は鳴いて舟を送り、山花は笑って人を迎える。

(その九)
舟は山の麓を巡り、山は舟の後ろへと遠のいていく。
山の姿を見足りずに、瞳は常に後ろを振り返る。

(その十)
水は浅く人の顔を映し、魚は菱の花の中にいる。

餌を投げても釣り鉤を疑わなくてよいぞ、私には魚を釣ろうという魂胆などすでになくなっているのだから。

（その十一）

何度も浅瀬を過ぎ、かつかつと船に音が響く。
船底は紙のように薄く、砂利を打ちながら進んでいく。

（その十二）

春の水はよく舟を進め、春の風は帆にやさしく吹く。
たちどころに長い岸が尽き、網干の竹林が厳かに現れる。

【参考】懐徳堂文庫所蔵「竹山・履軒諸先生張交（はりまぜ）」と題箋の張られた屏風中の「舟行雑詠」では、『履軒古風』のその十が九番目に、その九が十一番目にあり、両首の間に『履軒古風』にはない以下の作品がある。

舟中有屈生*　舟中に 屈生有りて
莫謾誇独醒　独り醒めたりと謾誇すること莫かれ
魚小不堪葬　魚 小さくして 葬るに堪えず
水浅不没脛　水 浅くして 脛を没せず

【注】○屈生…憂国の詩人として有名な屈原のこと。以下、【解説】を参照されたい。○謾…あなどる。

【訳】舟の中で、屈原がいて、〔世の中で〕自分だけが醒めていると誇るな。
魚は小さくて〔「漁夫辞」にあるように、人を〕葬ることもできないし
水は浅くて脛にも達しない（「漁夫辞」にあるように、足を洗うこともできない）。

【解説】『楚辞』で屈原作と伝えられる「漁夫辞」を踏まえる。同詩では、放逐され、世の混濁を嘆く屈原に対し、漁夫が世に合わせて生きていくことを説いている。関係する原文は以下のようである。

・屈原曰、挙世皆濁、我独清。衆人皆酔、我独醒。是以見放。
（屈原が、世の中は皆濁り、私だけが清んでいるので放逐されたと言う。）
・屈原曰、…寧赴湘流、葬於江魚之腹中、安能以皓皓之白而蒙世俗之塵埃乎。
（屈原が、純白の身を濁った世の中で汚すより、投身自殺して魚の餌になる方がましだと言う。）
・漁夫…乃歌曰、滄浪之水清兮、可以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可以濯吾足。
（漁夫が、水が清んでいれば冠の紐を洗えば良いし、

濁っていれば足を洗えば良い（状況に合わせて行動しろ）と言う。）

食板銘

＊まな板を擬人化してその食への耽溺を諫める銘。銘はいさめの言葉。

民之有生　民の生有るは
得食維艱　食を得ること維れ艱んず。
惟茲口腹　惟だ茲の口腹
有性自天　性の天よりする有り。
惟哲知命　惟だ哲のみ命を知り
不敢沈湎　敢えて沈湎せず。
几案申警　几案に警を申ぶ
厳恪饔飧＊　饔飧を厳恪にせよ、と。
彼昏不知　彼昏くして知らず
溺心芻豢＊　心を芻豢に溺る。
饔餐＊敗義　饔餐　義を敗り
与色同愆　色と愆ちを同じくす。
易牙＊乱斉　易牙　斉を乱し
阿衡＊昌殷　阿衡　殷を昌んにす。
矧此蒙士　矧んや此の蒙士の
敢求飽安　敢えて飽安を求むるをや。
古人有言　古人　言有り
咬得菜根＊　菜根を咬み得る、と。

【注】○饔飧…饔は朝食、飧は夕食。○芻豢…家畜。転じてご馳走の意。○饔餐…飲食を貪るとされる悪獣。青銅器の装飾に多く用いられた。○易牙…斉の桓公の宦者。厨房を司り桓公の寵愛を受けた。君主に取り入るために自らの子を料理した故事（「燕子食君」）で有名（『韓非子』十過篇、二柄篇、『管子』小称篇などに見える）。○阿衡…殷代の名宰相、伊尹の職名。『蒙求』の「伊尹負鼎」の項に、伊尹が湯王に仕えるために料理人になり、遂に志を得て宰相の位にのぼったことを述べる。○咬得菜根…朱子『小学（外篇）』末尾に、汪信民の言葉として「人常咬得菜根、則百事可做」とある。『呂氏師友雑録』に因る言葉だと言う。貧窮の中に大事をなす素地ができる、の意。また、この言葉に題名を取った明代の洪自誠の『菜根譚』も有名。

【訳】
庶民の生活においては、食を得ることが問題だ。
この飲食は、天性によるものだ（どうしようもない）。

ただ賢人だけが天命を知って酒食に耽ることがない。
机の上に「食事を慎め」という警句を書いても、
彼は蒙昧無知にして、ご馳走に耽溺する。
饕餮（＊ここでは心の悪い面を言うのであろう）が道義を破り、色欲と罪を同じくする。
易牙は〔道義に背いた飲食で〕斉の国を乱し、〔一方〕伊尹は殷を盛んにした。
〔古の賢人さえこのように様々あった。〕ましてやこの蒙昧の士が満腹や安逸を求めるのはどうしようもない。
古の人は次のように言った。
草の根を噛め〔そうすると何事も成し遂げることができる〕、と。

履軒吟

＊履軒が自らの生き方を表明した詩。履軒という号に託した思いが読み取れる。

寥々乎林之丘乎　　寥々たり　林の丘
浩々乎河之洲乎*　　浩々たり　河の洲
飄々乎天之衢乎　　飄々たり　天の衢
隠々乎山之幽乎　　隠々たり　山の幽
気象之殊兮有昼夜乎　　気象の殊なるや　昼夜有るも
吾心所適兮無春秋乎　　吾心適う所　春秋無し。
紅塵不至兮白丁弗遇　　紅塵至らず　白丁遇わず
披陳編兮尚友兮前修　　陳編を披きて　前修を尚友す。
務遠心之害兮　　務めて心の害を遠ざけ
胡憫乎躬之疾　　胡ぞ躬の疾を憫まんや。
嗟嗟、履之无妄*兮　　嗟嗟、之を履むこと妄ならず
庶幾乎彷彿　　彷彿たるを庶幾う。
中而下位兮　　中にして下位にあり
剛而能屈　　剛にして能く屈す。
我其夙夜　　我其れ夙に夜に
履道之坦兮　　道を履むこと之れ坦たり。
享貞之吉　　貞の吉を享け
優哉游哉　　優なるかな　游なるかな
聊以卒歳*兮度日　　聊か以て歳を卒え日を度らん。

【校勘】○浩々…中井木菟麻呂『懐徳堂水哉館先哲遺事』所収の「履軒幽人伝」では「澔々」に作る。○妄…北山写本は「忘」に誤る。

【注】○履之无妄以下…『易経』履卦九二爻辞に「履道坦々、幽人貞吉（道を履むこと坦々、幽人貞にして吉）」とあり、その象伝に「幽人貞吉、中不自乱也（幽人貞吉とは、中

自ら乱れざるなり）」とある。履軒はこれを自分の生き方の基準とした。○卒歳…『楚辞』「九辯」に見える。

【訳】ひっそりとした林。広々とした川の洲。ヒューヒューと天の道。黒々とした山の深み。様々な現象により昼夜ができるが、私の心の適うところには春秋がない。俗事も至らず仕官もせず、古い書物を開き、古人を友にする。つとめて心の害を遠ざけ、どうして我が身の病を憂えよう。ああ、道を踏み行うこと正しく、〔完璧は望まず〕だいたいのところを目標にする。中ぐらいでありながら下位におり、剛（つよ）いがよく屈す。朝に夕に坦々と道を踏み行い、正しい吉を受ける。〔そうして〕ゆったりと、いささか年を終え、日を過ごそうとしよう。

【参考】

「履軒幽人伝」（『懐徳堂水哉館先哲遺事』所収、同書には「弊帚旧稿ニ載ス」と言う）

幽人居一楼、南北有牖、南棚葡萄延蔓盈区、翠光撼席、実之離々可頫（フ・ふす）而哺也。故命斯楼曰、龍珠之楼。北牖之外、展枝可踞、施欄可倚、脩竹青々、傍欄而宜上者数十竿矣。扁其上曰履、志其脩也。故自号曰、履軒幽人。性多病不喜出、不邀客、終日兀坐、図書著作之外、無復嗜好也。読書又不能彊力、毎未及倦而輟、輒倚梧対此君、隠几眄龍珠、清風時来、簷鐸鏘然、幽人意甚適也。若斯者十年如一日、蓋将以是自終焉者也。其所誦詩曰、

寥々乎林之丘乎、…

詠史（史を詠ず）　孔安国

＊孔安国は、前漢の儒者。孔子旧宅の壁から発見されたという古文の『尚書』、『論語』を献じたことで有名。

漢家尊礼執唾壺＊　漢家 礼を尊び 唾壺を執らしめ
僕々＊胡遑耻鼎問＊　僕々は胡（なん）ぞ鼎問を耻ずるに
　　遑あらんや。
祖孫遺業壁中簡　祖孫の遺業 壁中の簡
寧料大道資詁訓　寧（いずく）んぞ料らんや
　　大道 詁訓を資けんとは。
褒聖＊任他万斯年　褒聖（さもあらばあれ）任他 万斯年
掌上天下＊不復運　掌上の天下 復びは運らず

【注】○執唾壺…『漢書』孝献帝紀注が引く『漢官儀』に「武帝時、孔安国為侍中、以其儒者、特聴掌御唾壺、朝廷栄之」と見える。○僕々…煩わしいことという意味

もあるが、ここではしもべ、下々の者の意に解した。○耻鼎問…「耻下問」という語を踏まえると考えられる。『論語』公冶長篇では「耻下問」（下問を恥じる＝目下に尋ねることを恥じる）ことのないことが、「文」の要素として挙げられている（原文「敏而好学、不恥下問、是以謂之文也」）。「問鼎軽重」という語「問鼎軽重」（鼎の軽重を問う）で、天下を窺うことの意があるが、ここでは関係がないと考えた。○褒聖…孔子のこと。後世に贈られた追諡の一つ。○掌上天下…『孟子』公孫丑上篇に、儒教の仁政を行えば、天下を治めることは掌上に運らすようなものだ（簡単だ）と言ったとある（原文「孟子曰、「人 皆有不忍人之心。先王有不忍人之心、斯有不忍人之政矣。以不忍人之心、行不忍人之政、治天下、可運之掌上」」）。

【訳】漢王朝は礼儀を尊んで〔孔安国に〕儒者に皇帝の痰壺を管理させ、下々の者は〔礼儀の習得に忙しく〕、どうして儀式の鼎について尋ねることを恥じている暇があろうか。？ 祖先の遺業である壁の中の木簡が、大道の訓詁の助けになるとは思いも寄らなかった。〔だが〕孔子の時から万年経って、もはや天下を掌上に運らすことはできない。

題夢蝶図（夢蝶図に題す）

＊有名な『荘子』の胡蝶の夢を題材とした蔀関月の画への画賛。

周之未夢兮無蝶
蝶之方飛兮無周
蝶果不知周*乎
嗟周也既知蝶之喩*矣
周自知其蘧々*乎
即蝶之栩々
蝶自知其栩々乎
即周之蘧々
人病不知喩其所喩
必欲喩人之所喩
猶周之欲蝶於栩々
而蝶之欲周於蘧々

周の未だ夢みざるや蝶無く
蝶の方に飛ぶや周無し。
蝶果たして周を知らざるか
嗟 周や既に蝶の喩しみを
知れり。
周自ら其の蘧々たること
即ち蝶の栩々たるを知れり。
蝶自ら其の栩々たること
即ち周の蘧々たるを知れり。
人 其の喩しむ所を喩しむを
知らざるを病み
必ず人の喩しむ所を喩しまんと
欲するは
猶お周の蝶の栩々たるを欲し
蝶の周の蘧々たるを欲するが
ごとし。

【注】○不知周…『荘子』斉物論篇原文に見える。履軒『荘子雕題』は、この部分に「『不知周』言蝶不自知其身本

為荘周也」と言う。○喩…楽しみ。これも『荘子』斉物論篇原文に見える語。○蘧々…『荘子』斉物論篇原文に見える語。履軒『荘子雕題』は、「『蘧々』猶朴々、是揚々之反、即与栩々対」と言う。つまり、「栩々」は楽しげな様、「蘧々」は気が晴れない様。

【現代語訳】荘周がまだ夢をみていない時には蝶はいないし、蝶が飛んでいる時には荘周はいない。蝶は果たして荘周を知らないのだろうか。〔でも〕荘周〔の方〕は蝶の楽しみを知っている。荘周は、自ら自分が鬱々としていることは、〔実は〕蝶が楽しげなことと同じであることを知っている。蝶は、自らが楽しげなことは、〔実は〕荘周が鬱々としていることと同じであることを知っている。人が自分が楽しむところを楽しむことを知らないことを思い煩い、人の楽しむところを楽しもうとするのは、荘周が蝶に楽しみを求め、蝶が荘周に鬱々とすることを求めるのと同じだ（適わぬ望み、あるいは求めるべきでない望みだ）。

【参考】履軒の文集『弊帚続編』にも、胡蝶の夢を題材にした詩が以下の三首に見える。

題夢蝶図（夢蝶図に題す）

周之夢為蝶与。*蝶之夢為周与。自千載之後観之、蝶亦夢也、周亦夢也。栩々之与蘧々、奚択焉。嚮製此図者、亦已夢、今之題言者、独得非夢邪。則後之観焉者、遞亦皆夢已。嗟乎、人能自知身之夢、而不動於欲、不訹於利与名、逍遙保其性、而全其天、此則善処乎夢者、斯之謂真覚。

履軒幽人夢中、筆於華胥国天楽楼偸語欄*之下。

【注】○周之夢為蝶与…『荘子』本文にもある。○華胥国天楽楼偸語欄…履軒は自分の居宅、書斎、書斎の欄干をこのように名づけた。華胥国とは、黄帝が夢に遊んだとされる古代の理想国で、『列子』に見える。天楽とは、『荘子』天道篇の「与人和者、謂之人楽。与天和者、謂之天楽（人の和に与る者、之を人楽と謂い、天の和に与る者、之を天楽と謂う）」に因る言葉で、高い境地の楽しみを言う。また、偸語とは、いい加減な言葉。履軒が自分が放言する様を謙遜して言ったもの。『春秋左氏伝』襄公三一年に、叔孫豹が趙孟の死を予言し「趙孟将死矣。其語偸、不似民主（その言葉がなおざりでとても君主のように見えない）」と言ったとあることに基づく。履軒著『弊帚続編』には、「華胥国記」、「天楽楼記」、「偸語

欄戒約」という文章が見える。

【書き下し文】周の夢に蝶と為るか。蝶の夢に周と為るか。千載の後より之を観れば、蝶亦た夢なり、周亦た夢なり。栩々の蘧々と、奚れか択ばん。嚮に此の図を製する者、亦た已に夢なり、今の題言する者、独り夢に非ざるを得んや。則ち後の焉を観る者、遞いに亦た皆な夢のみ。嗟乎、人能く自ら身の夢たるを知り、欲に動かず、利と名とに訧れず、逍遙として其の性を保ち、其の天を全うすれば、此れ則ち善く夢に処する者にして、斯れを之れ真覚と謂わん。

履軒幽人 夢中に、華胥国天楽楼偸語欄の下に筆す。

【訳】荘周が夢で蝶になったのか、蝶が夢で荘周になったのか。千年の後から見れば、蝶もまた夢、荘周もまた夢である。楽しげなのとがっかりしているのと、どちらも変わりはない。先にこの図を作った人は、すでに夢（幻）と消えていった。今、題辞を書く人も夢（幻）と消えてゆき、後にこの図を見る人も、夢（幻）と消えていくであろう。ああ、人が自分の身が夢（幻）であることを知り、欲に動かされず、名利の誘惑を受けず、悠然と養生し、その天性を全うできれば、これがすなわち夢によく対処するする者であり、これを真覚（本当に覚めている者）というのだ。

履軒幽人が夢の中で、華胥国天楽楼偸語欄のもとで記す。

【解説】荘子よりさらに高みに立ち、すべては夢であるという。

題夢蝶図（夢蝶図に題す）

周之覚之蘧々、而羨蝶之夢之栩々、其亦有味哉。夫転世輪廻、苟信有焉、吾願従事焉。如牛之臥嚼草、鶴之舞于天、夏魚之浮游、秋虫之悲吟、可羨者亦多矣。夫畏転輪者、不知何悲。

【書き下し文】周の覚むるや蘧々たりて、蝶の夢の栩々たるを羨むは、其れ亦た味有るかな。夫れ転世輪廻、苟も信に焉有れば、吾 焉に従事せんことを願う。牛の臥して草を嚼み、鶴の天に舞い、夏魚の浮游し、秋虫の悲吟するが如き、羨むべき者亦た多し。夫れ転輪を畏るる者、何を悲しむかを知らず。

【訳】荘周が覚めている時にはがっかりしていて、蝶が夢で楽しげなことを羨むのは、また味があることだ。本

当に輪廻転生ということがあれば、私はぜひ体験したいものだ。牛が寝転がって草を噛んだり、鶴が天に舞ったり、夏の魚が遊泳したり、秋の虫が鳴いたりなど、羨むべきものは多い。輪廻転生を畏れる者は何を悲しんでいるのか理解できない。

【解説】仏教では苦しみと見る輪廻を、相対的視点からまたよしとし、動物となるのもよいではないかと言う。

題画蝶（画蝶に題す）

栩々然、蝶之楽也至矣。豈吾精魂所化耶。抑千載之前、荘周所化、儼然猶存于今耶。酔中夢思朦朧、不能辨是非、且録此、以問於観者。

【書き下し文】栩々然として、蝶の楽しみや至れり。豈に吾が精魂化する所ならんや。抑（そもそ）も千載の前、荘周 化する所、儼然として猶お今に存するや。酔中 夢思朦朧とし、是非を辨ずる能わざれば、且（しばら）く此に録し、以て観者に問う。

【訳】栩々として、蝶の楽しみは極まっている。もしや、私の精神が化したものなのであろうか。そもそも千年前に、荘周が化したところが厳然として今も存在するのだろうか。酔っぱらい夢うつつの状態で、是非の判断ができないので、とりあえずここに記録して、見る人に問いたい。

【解説】ここでは、蝶の楽しみは私の楽しみか、あるいは荘周の思いが残っているのかと嘯く。先の詩では、現実が夢（幻）であることを強調していた履軒であるが、ここでは、むしろ、時代を超越した精神の永遠性を詠っているかようである。

以上、履軒は「栩々」「蘧々」（うれしい感情と悲しい感情）という言葉を多く取り上げている。「蘧々」を「栩々」と対にし、鬱々たる状態をいうとするのは一般的訓詁ではない（成玄英疏には「驚動之貌」と言う。履軒が雕題を付けている林希逸『荘子鬳斎口義』は「偃直之貌」と言う。ここの注釈ではないが『韻会』には「蘧々」は「自得之貌」とある（履軒と全く逆））。それをわざわざ対に解釈し、この一節は幸福感が云々したものととらえる点に履軒の特徴がある。やや強引だと言えるが、履軒の特徴（世俗的幸不幸から解放されたい？）がよく表れた箇所と言えよう（拙稿「中井履軒の老荘観」の末尾近く「履

軒の思想が表れた部分」の履軒の人生に対する考えを参照されたい）。

【参考】画に関する情報

履軒の孫の『並河寒泉遺稿』巻八（丁巳稿（安政四年）一ノ上、第八）二十五葉「安政丁巳仲冬」に「書幽人先生賛荘周画幅匣陰」という文章がある（注）。これによれば、蔀関月（一七四七～一七九七）の画に履軒が賛を付けたものと言う。題名からすると「題夢蝶図」なのであろう。

（注）原文「荘生夢蝶図、関月蔀氏画之、幽人先生賛之。賛辞収在先生『弊帚』中、其賛辞蓋是幅而成焉者、可珍襲焉。嘗聞斯幅也、丹丘醸家某氏所蔵、今也転為他家之蔵、是亦荘生夢蝶妄幻之所以験也与。噫」。

蔀関月については、高松良幸「蔀関月の画業―懐徳堂との交流を中心に」（『フィロカリア』十一号、大阪大学文学部美学科、一九九四年）が詳しい。同稿では、蔀関月が一七八三年から一七九二年まで懐徳堂に住んだことや、その画に竹山や履軒の賛が多く見られることが紹介されている。ただし、「荘生夢蝶図」については言及されていない。

竹山が賛を着けた蔀関月の画には確認できるものは以下のようである。一つは、「海楼之図」（『関西大学所蔵大坂画壇目録』一二九頁）の「歸矣城楼、煥矣丹青、滄溟万里、坐我洞庭（竹山居士題）」というもので、『奠陰集（詩集）』巻三（影印本三一一頁）に「岳陽楼図賛」として見える。もう一つは、蔀関月筆、中井竹山賛「春山花見図」（大阪大学懐徳堂文庫蔵121 042 001、平成十年購入、『懐徳』六七彙報に紹介あり）である。

観青赤二神相撲図、戯題（青赤二神相撲図を観、戯れに題す）

*画賛。どのような画であったかは未詳。博雅の士のご教示を仰ぎたい。

赤者南極之老*耶　赤は南極の老か
青者東帝*之使乎　青は東帝の使いか
*争霊功兮*不相下*　霊功を争いて相い下らず
*卜嬴兮*一場戯　嬴（か）ちを卜（うらな）う　一場の戯

【校勘】○争…「救済」を見せ消ち。○兮…「争」を見せ消ち。○相下…「決」を見せ消ち。○卜…「輸」を見

せ消ち。○兮…「枉付」（？）を見せ消ち。

【注】○南極之老…七福神の中の寿老人のことを南極老人とも言う。○東帝…未詳。

【訳】赤い方は南極老人（寿老人）であろうか。青い方は東帝？の使いであろうか。霊功を争って相い下らず、雌雄を決せんと一試合交える。

壻語婦（壻（むこ）婦（つま）に語る）二首

＊婿が嫁に語る詩。履軒は、宝暦十三年（一七六三）に革嶋みわを娶っている。この詩は、配列順からすると、それより以前に書かれたものであると思われる。

貯爾無金屋　　爾（なんじ）を貯うるに金屋無く
紙窓任爾補　　紙窓　爾（なんじ）の補うに任す。
借問鮑宣妻＊　　借問す　鮑宣の妻
有短布裳無　　短き布裳有りや無しや、と。

伯姒爾兄姊　　伯姒は爾（なんじ）の兄姊にして
阿姑爾阿母　　阿姑は爾（なんじ）の阿母なり。
我短向他説　　我の短は　他に向かいて説くも
向我莫説他　　我に向かいては　他を説く莫かれ。

【注】○鮑宣妻…桓少君。裕福な出身であったが、自ら進んで貧しくして贅沢を好まない夫に従い、賢婦として称えられたと言う。『後漢書』鮑宣妻伝に短い衣裳を着た（「著短布裳」）とある。

【現代語訳】お前を住まわせるのに立派な屋敷もなく、障子はお前が繕うに任せる。ちょっとお尋ねする、鮑宣の妻よ、短い衣裳はあるか（貧乏の覚悟はできているか）。
　義理の姉もお前の実の姉だ、姑はお前の実の母だ。私の短所は彼らに告げてもよいが、彼らの短所は私に告げるな。

小婦釣魚（小婦　魚を釣る）

＊釣りに慣れない若い娘が青年に助けを求める様子を詠った詩。

未慣釣魚術　　未だ釣魚の術に慣れず
鈎餌倩郎理　　鈎餌は倩郎が理（おさ）む。
更請釣出時　　更に請う、釣り出だす時
為儂卸魚鰓　　儂（われ）の為に魚鰓（ぎょさい）を卸せと。

【訳】まだ釣りには慣れず、エサや釣鉤は若者任せ。その上さらに、釣り上げた時には私のために鰓から針を外してちょうだいとおねだりする。

霜葉

＊霜葉は紅葉のこと。

喚霜染我衣　霜を喚びて　我が衣を染め
呵風戒我駕　風を呵りて　我が駕を戒む。
料知草玄人*　料り知る　草玄の人の
奇字*待我写　奇字　我が写すを待つを。

【注】○草玄…漢の楊雄作の『太玄経』の別名。後、世事から離れて著述に専念することを言う。○奇字…『漢書』芸文志に書体の一つとして見えるが、ここでは、奇なる字、あるいは文章と解した。

【訳】霜を喚んで私の衣を染め、風をしかって私が舞い上がるのを押さえる。おそらく、風流人が妙なる文字（文章）（紅葉が美しい文をなすことを喩えるか）を私が書くのを待っているのだろう。

擬唐詩（唐詩に擬す）

＊【解説】を参照されたい。

人言生男好　人は男を生むは好しと言うも
争知父母情　争でか父母の情を知らんや。
生女不下堂　女を生めば堂を下されざるも
生男向辺城　男を生めば辺城に向かう。

【訳】人は男を生むのがよいと言うが、どうして、父母の情を知りえようか。女を生んでも離縁はされないが（？）、男を生めば辺疆の城に向かうことになる。

【解説】息子を生むよりも娘を生む方が良いと詠う唐詩に、以下のようなものがある。

・杜甫「兵車行」「信知生男悪、反是生女好。生女猶得嫁比隣、生男埋没随百草。」
・白居易「長恨歌」「遂令天下父母心、不重生男重生女。」

周道有松

＊『詩経』風の四言詩で讃岐の良医尾池恭菴の長寿を祝す。竹山『奠陰集（詩集）』巻二に「寿恭菴医士六袤詞二闋」（影印本二九三頁）がある。履軒の詩も同じ時（竹山は吉野行（宝暦十三年（一七

六三）の頃）に書かれたもので、恭菴の還暦を祝う詩なのであろう。讃岐は、懐徳堂初代学主の三宅石庵が四年滞在したこともあり、懐徳堂と繋がりがあった。

周道有松、寿尾池恭菴也。恭菴、讃之良医、邦人仰之如神。故詩人賦此、使讃人歌以送觴。

「周道有松」は、尾池恭菴を寿ぐなり。恭菴、讃の良医にして、邦人之を仰ぐこと神の如し。故に詩人此を賦し、讃人をして歌いて以て觴を送らしむ。

周道*有松　周道　松有り
其陰翳々　其の陰　翳々。
君子寿考*　君子　寿考し
靡勩我思　我が思いを勩る靡かれ。

周道有松　周道　松有り
翳々其陰　翳々たり　其の陰。
君子豈楽　君子　豈楽し
実慰我心　実に我が心を慰む。

周道有松　周道　松有り
可以留連　以て留連すべし。
彼其之子　彼れ其の子
邦之司命　邦の司命。

我有父母　我に父母有り
我有稲粱　我に稲粱有り。
君子之光　君子の光
俾我能養　我をして能く養わしむ。

我有子兮　我　子有り
我有孫兮　我　孫有り。
君子有祉　君子祉有り
庶幾靡患　患い靡きに庶幾し。

父母生我　父母　我を生み
誰俾我寿　誰か我をして寿からしむ。
欲報之徳　之が徳に報いんと欲して
我心悠々　我心悠々たり。

春酒在瓶　春の酒は瓶に在り
嘉肴在俎　嘉き肴は俎に在り。
酌言*献之　酌みて之を献じ

以永厥祜　　以て厥の祜を永くす。

春酒盈瓶　　春の酒は瓶に盈ち
穠花盈庭　　穠れる花は庭に盈つ。
且歌且舞　　且つ歌い且つ舞う
君子之堂　　君子の堂。

黄髪台背*　　黄髪台背を
毋謂一家之慶　　一家の慶びと謂う毋かれ。
祈爾永年　　爾が永年を祈るは
維百里*之寿星　　維だ百里の寿星なればなり。

周道有松、九章章四句

【注】○周道…『詩経』「小雅」「四牡」などに見える。大きな路の意。○寿考…長生きの意。『詩経』「大雅」「行葦」に見える。○酌言…言は助字。酌言は、『詩経』「小雅」「瓠葉」に見える。○台背…しみ肌。『詩経』「大雅」「行葦」に見える。○百里…方百里の地。転じて一県の地。

【訳】
大きな路に松があり、その陰は深々としています。君子が長生きなされ、私は安心していられます。
大きな路に松があり、深々としています、その陰は。君子がお楽しみあそばされ、私の心は慰められます。
大きな路に松があり、引き留められます。あなた、その人は、国の重要な救い主です。
私に父母がおり、食べ物もあります。君子のお光により、私は養生することができます。
私に子がおり、孫がおります。〔これも〕君子のお恵みのお陰で、ほとんど患いがありません。
父母は私を生み、誰が私を長生きさせるのでしょう。このご恩に報いようとして、私の心は思い悩みます。
春の酒は瓶にあり、おいしい肴は俎の上にあります。ここにこれらを献上して、その幸せが長く続くようにしたいと思います。
春の酒は瓶に満ち、咲き誇る花は庭に溢れています。歌いかつ踊ります、君子の屋敷で。
長寿を全うされていることを一家の慶びと言わないでください。あなたの長寿を祈るのは、国全体の長寿星だからなのです。

幽情賦

＊これも履軒が自らの生き方を宣言した詩として重要。なお、「幽

情」という語は、班固『西都賦』に見える。

履軒幽人独坐読書。思方濃、有客来勧其仕。幽人仰而笑、俯弗答。客弗懌、援古談今、問難旁午*。幽人竟不有所答焉。援筆作幽情賦、以寓意。客受読焉、怡然若有領意、盛諸懐而去。其辞曰、

履軒幽人独り坐し読書す。思い方に濃にして、客有り来たりて其の仕うるを勧む。幽人仰ぎて笑い、俯して答えず。客懌ばず、古を援き今を談じ、問難すること旁午たり。幽人竟に答うる所有らず。筆を援きて幽情の賦を作り、以て意を寓す。客 受けて読み、怡然として意を領る所有るが若く、諸を懐に盛りて去る。其の辞に曰く、

春日遅遅*　　春日 遅遅たり
鳥鳴喈喈　　鳥 鳴くこと 喈喈たり。
春去在昨　　春 去ること 昨に在り
忽諸又来　　忽ち諸又来たる
四序之循環兮　　四序の循環するや
紛轇轇其如馳　　紛轇々として其れ馳せるが如し。
感我生之易邁　　我が生の邁ぎ易きに感じ
思昔人兮流涕　　昔の人を思いて涕を流す。
嘽嘻、皇考之愛我*　　嘽嘻、皇考の我を愛するや
誨我兮自夫未有知　　我を誨うるに夫の未だ知有らざる
　　よりす。
言則以愈　　言は則ち以て愈し
食則以右　　食は則ち以て右にす。
維方齠亂*　　維れ齠亂するに方り
載就師氏*　　載ち師氏に就く（就かしむ？）。
容止是修　　容止は是れ修め
組紃麻枲*　　紃を組み麻枲とり
習劉向之伝*　　劉向の伝を習い
誦班氏之誡*　　班氏の誡めを誦す。
素心洵其為矢　　素心洵に其れ矢いを為し
指古人兮自期　　古人を指して自ら期す。
胡我之不揚兮　　胡ぞ我の揚がらず
乏玉容与壊姿　　玉容と壊姿とに乏しきや。
幸無贅瘤*懸於頤　　幸いに贅瘤の頤に懸かる無く
庶幾修飾以潔思　　修飾し以て思いを潔くせんことを
　　庶幾う。
愧夫粉墨也乱真　　夫の粉墨の真を乱すを愧じ
羞於妖妍之嫵媚　　妖妍の嫵媚の厖雑を服して
服厖雑兮不衷　　衷ならざるを羞ず。
鑑於詩人之刺　　詩人の刺めに鑑み

介然而自守
維以与世違

春日遅遅
鳥鳴喈喈
含哺而反
将雛而飛
草木綺其栄茂
発芬芳乎清墀
万物得其情
欣々其相嬉
維我之独矣
誰与而展懐
当冷風而奏梳（疏？）
髪鬖々兮長垂
臨清漣而礥面
素顔映而相視
曳朱裾而襲素衣
佩芳蕙兮簪花枝
賦窈窕兮托興*
撫錦瑟以写思
景翳々漸以傾

介然として自ら守り
維れ以て世と違う。

春日　遅遅たり
鳥　鳴くこと　喈喈たり。
哺を含んで反り
将に雛たりて飛ばんとす。
草木　綺として其れ栄茂し
芬芳を清墀に発す。
万物　其の情を得
欣々として　其れ相い嬉ぶ。
維れ　我之れ独りなり
誰と与に懐いを展べん。
冷風に当たりて　奏梳（疏？）し
髪鬖々として長く垂る。
清漣に臨みて　面を礥い
素顔　映じて　相い視る。
朱裾を曳きて　素衣を襲
芳蕙を佩びて　花枝を簪とす。
窈窕を賦し　興を托し
錦瑟を撫して　以て思いを写す。
景翳々として　漸く以て傾き

鳥声喧而帰棲
思断続而弗接
魂迷朦其如疲
天黯淡而弗辨
心鬱陶其傷悲
就角枕而憩息
耿々兮不成寐
推衾而起以坐
聊整衣而蹇帷
月娟々懸乎樹端
帯唐棣之瑶枝
光璨々入我懐
気凄々徹乎肌
歎貞操之無儔
悼歳月之徒逝
嗟夫、世之昧昧兮
淫辟日以熾
嘉冶容之虚飾
棄中情*之貞思
汨蕩々乎無所戻止
夫天倫之炳如
我胡為乎廃之

鳥声喧しくして棲に帰る。
思い　断続して接らず
魂　迷朦して其れ疲るるが如し。
天　黯淡として辨ぜず
心　鬱陶して　其れ傷悲す。
角枕に就きて　憩息すれども
耿々として　寐りを成さず。
衾を推して　起きて以て坐し
聊か衣を整えて　帷を蹇げれば
月娟々として　樹端に懸かる。
唐棣の瑶枝を帯び
光璨々として　我が懐に入り
気凄々として　肌に徹す。
貞操の儔無きを歎き
歳月の徒らに逝くを悼む。
嗟夫、世の昧昧たるや。
淫辟　日々以て熾んに
冶容の虚飾を嘉みす。
中情の貞思を棄て
汨蕩々として　戻止する所無し。
夫れ　天倫の炳如たる
我　胡ぞ之を廃するを為さん。

輝章甫於越郷　　章甫を越郷に輝かせれば
烏知我之匪戻　　烏(いずく)んぞ我の戻らざるを知らん。
毀玉而為瓦　　玉を毀ちて瓦と為すは
心寧忍為之　　心寧(なん)ぞ之を為すに忍びん。
噫、伯鸞*弗再矣　　噫(ああ)、伯鸞再びして
欽徳輝于千載　　欽徳千載に輝かず。
維我其無所遇矣　　維(た)だ我其れ遇う所無し
寧幽独兮守素志　　寧(むし)ろ幽独して素志を守らん。

【校勘】○愛我…「愛乎我」の「乎」を墨筆で消す。北山写本では残している。○就師氏…「就」は墨筆で消しているが残した。

【注】○旁午…入り交じること。○春日遅遅…『詩経』「豳風」「七月」、『詩経』「小雅」「出車」に見える。○齠齔…歯が生え替わること。『顔氏家訓』「序致」に「昔在齠齔、便蒙誨誘」とある。○組紃麻枲…組紃はひも。麻枲は麻。これらを作れることが女子のたしなみとして『礼記』「内則」（家庭での礼を述べる）に見える。（「女子十年不出。姆…執麻枲、治絲繭、織経、組紃。」）○劉向之伝…前漢の学者劉向作の『列女伝』のことであろう。○班氏之誡…『漢書』の編纂で有名な班固の妹の班昭（曹大家）が女子教育ために著した『女誡』七篇を言うのであろう。○贅瘤…名誉や位のこと。嵇康「答難養生論」に「蓋将以名位為贅瘤…」とある。○興…物に託して表現する法。古来『詩経』について「風・雅・頌、比・賦・興」の六義があると言われている。○中情…『楚辞』に多く見える。○伯鸞…後漢の梁鴻の字。梁鴻は人に頼らず行いを全うした人。履軒が雕題をつけている『世説新語補』「徳行上」に見える。なお、『履軒古風』巻三「祭亡妻」では「十載伯鸞妻」と自分を伯鸞に喩えている。

【訳】履軒幽人が独り座り読書し思考が深まっていたその時、客が来て仕官を勧めた。幽人は顔を上げて笑いつむいて答えなかった。客は気分を損ね、昔を例にし今を談じて質問責めにした。幽人は終始（とうとう）答えず、筆を引き幽情の賦を作って思いを託した。客は受けてこれを読み、なるほどと思いを悟ったようで、これを懐にしまって帰っていった。その言葉は次のようであった。

春の日はうらうら、鳥はちっちっと鳴く。
春が去ったのは昨日なのに、たちまちまた来る。
四時が循環するのはごうごうと駆けるかのようだ。
我が人生の過ぎやすいのに感じ、昔の人を思って涙を流す。

ああ、亡き父は私を慈しんでくださった。
私が物心つかないうちから教育し、言葉を直し、箸を右手に持たせてくださった。
歯の生え替わる頃には、教師をつけ、容儀を修めさせてくださった。
紐の編み方や麻の取り方を習い、劉向の『列女伝』を習い、班氏の『女誡』を暗誦した。
先人を目標にしようと、心から誓いを立てた。
〔それなのに〕なんと私の不甲斐ないことか。
見目麗しくもなく、ただ余計な瘤がぶら下がっていないことを幸いに、行いを慎み、思想を清くすることを願う。
女性の化粧に惑わされることを羞じ、美人の媚びが純粋でなく心正しくない（下心に満ちている）のを羞じる。
詩人の諫めに鑑みて、堅く自ら守り、そのため世の中と合わない。

春の日はうらうら、鳥はちっちっと鳴く。
餌を含んで帰り、雛が飛び立とうとする。
草木は美しく茂り、清い庭に芳香を放つ。
万物はその情に適い、にこにこと喜び合う。
ただ私だけがひとりぼっちで、誰に思いを述べることができようか。
冷たい風に当たり思いを述べ（髪をとかす？）、髪は乱れ長く垂れる。
清い漣に臨み顔を洗えば、素顔が映って、見つめあう。
朱色の裾を白い衣に重ね、香草を身に纏い、花の枝を簪にする。
美しきを賦し、感興を託し、錦の琴を奏でて思いを表す。
影は黒々と次第に傾き、鳥は喧しく鳴いて巣に帰る。
思いは切れ切れでつながらず、魂は混迷して疲れたようだ。
天は暗澹としてよく見えず、心は鬱屈して痛み悲しむ。
角枕について休もうとするが、意識がはっきりして寝られない。
布団を推して起きて座わり、いささか衣服を整えて帳を上げれば、
月は清らかに梢に懸かり、唐棣（＊履軒著『画觴（えくしり）』によれば「はねず」）が玉のような枝を帯びている。
光が燦々と私の懐に入り、空気は凛として肌に突き通る。
貞操を守る同志がいないのを嘆き、歳月が無駄に過ぎていくのを悼む。
ああ、世の中の暗いことよ。
よこしまが日々盛んになり、なまめかしい姿の虚飾をよしとする。
衷情の正しい志を棄て、ゆらゆらさまよい 戻ることが

ない。
そもそも天の道の明らかなるものを、私はどうして廃すことができよう。
儒冠を異郷に輝かせれば（他の地方に仕官すれば）、どうして私が戻らないことを知ろう（必ず戻る）。
玉を壊して瓦とすることは、どうしてなすに忍びよう。
ああ、〔独り徳行を全うした〕伯鸞が再び現れ、徳を千載に輝かすことはない。
私は世の中と合わない。
むしろ独り静かに清き志を守るとしよう。

有感（感有り）

＊これも自らの思いを述べた詩。

読書破万巻　　読書 万巻を破るも
身上無一成　　身上 一つも成る無くんば、
雖多其何益　　多しと雖も其れ何の益あらん
均不知一丁　　一丁を知らざるに均し。
傲然誇俗士　　傲然として俗士に誇り
皐比*坐揚揚　　皐比に坐すること揚揚たり、
是謂為他人　　是れを他人の為に
裁縫嫁衣裳*　　嫁の衣裳を裁縫すると謂う。
窃痛此風長　　窃かに此の風長ずるを痛み
惕然以自警　　惕然として以て自ら警(いまし)む。
言之若甚易　　之を言うは甚だ易きが若きも
践之実匪軽　　之を践むは実に軽からず。
眇眇我所服　　眇眇たり 我が服す所
日夕労経営　　日夕 経営を労す。
短褐*雖不温　　短褐 温(あたた)かからずと雖も
庶幾以自養　　以て自ら養うを庶幾(こいねが)う。

【注】○皐比…虎の皮。転じて、講義の席。○為他人裁縫嫁衣裳…他人のために働くこと（秦韜玉「貧女」詩）。また、『論語』憲問篇に「古之学者為己、今之学者為人」とあるのを参照。○短褐…貧しい人の喩え。ここでは徳を言うか。

【訳】万巻の書を読破しても、何も身に付いていなければ、多いと言っても何の益があろう。一字も知らないのと同じだ。傲慢に一般人に誇り、得意げに講義の席に着く。こういうのを「他人のために嫁入り衣装を作る」というのだ。〔私は〕密かにこの風潮が蔓延するのを痛み、慎んで自らを諫めている。これを言うのは簡単なようだが、実践するのは実に難しい。私が実行できるのはわずかな

ことだが、朝に夕に努力する。短い衣は温かくはないが、自分を養えればいい（養うことを希望する）。

城南墳

＊明和元年（一七六四）、履軒が師の五井蘭洲の墓参りをした際の作。自らの不甲斐なさを嘆く。五井蘭洲は宝暦十二年（一七六二）亡くなり、現大阪市天王寺区にある実相寺に葬られた。

甲申之歳　　甲申の歳
季春之望　　季春の望、
愾我夙歎　　我が夙歎を愾き
歩言南行　　歩みて言に南行す。
経閭閻之喧闐兮　　閭閻の喧闐たるを経
臨郊野之蒼茫　　郊野の蒼茫たるに臨む。
晨景慘而小雨　　晨景　慘として小雨ふり
霑我之衣裳　　我の衣裳を霑す。
飛花寂兮鳥音　　飛花　鳥音に寂として
雑彼兮鐘磬　　彼を鐘磬に雑ぜる。？みだす？
蕭寺綿相連　　蕭寺　綿として相い連なり
墳塋累稠々　　墳塋　累稠々たり。
惟人生之須臾兮　　人生の須臾なるを惟うも
曽弗遑乎回頭　　曽て頭を回らすに遑あらず。
顧瞻連甍之矗々兮　　顧みて連甍の矗々たるを瞻る。
死生昼夜而相求　　死生は昼夜なるも相い求め
素旆相逐　　素旆相い逐い
如之或駆　　之く　或いは駆けるが如し
独行易感　　独行して感じ易く
神愴踟躊　　神愴みて踟躊す。
肆上実相之丘兮　　肆に実相の丘に上り
展苔墳而洒掃　　苔墳に展りて洒掃す。
維先師之幽室兮　　維れ先師の幽室なり。
懐音容而灑涕　　音容を懐いて涕を灑ぐ。
歎日月之遄逝兮　　日月の遄かに逝くを歎くに
再期之忌欻将至　　再期の忌　欻ち将に至らんとす。
夫箕裘之莫継兮　　夫れ箕裘の継ぐ莫く
誰其頌徳而紀事　　誰か其の徳を頌え事を紀さん。
弟子故旧兮　　弟子故旧
揮涙以相規　　涙を揮いて以て相い規る。
謂我兄弟兮　　謂く我が兄弟
久学且芸　　久しく学び且つ芸あるを。
兄也撰辞＊　　兄や辞を撰し
弟也制字　　弟や字を制す。
爰咨爰謀　　爰に咨り爰に謀り
遂済其志　　遂に其の志を済ぐ。

買石命工
是董*是視
碑成孔懿
適今之時
載建載植
載土載築
環之以棘
有曄花樹
以照其域
其人如玉
整衣拝跪
傾衷情以愬思
噫、民之生于三兮
我独隠淪於草野
遘疚之未瘥兮
復遭師之徂
心旆旆而弗繫兮
胡我生之多岨
惆悵以思念兮
伊遺音之誘我
矢心其循止
豈謂報徳乎

石を買いて工に命じ
是れ董り是れ視り
碑成り孔だ懿し。
今の時に適たり
載ち建て載ち植て
載ち土し載ち築く。
之を環らすに棘を以てし
曄花の樹有り
以て其の域を照らす。
其の人 玉の如し。
衣を整え拝跪し
衷情を傾け以て思いを愬う。
噫、民の三に生まるるや
我れ独り草野に隠淪し
疚の未だ瘥えざるに遘い
復た師の徂くに遭い
心旆旆として繫がれず。
胡ぞ我が生の岨多きや。
惆悵して以て思念す。
伊れ遺音の我を誘い
心に其の循止するを矢う。
豈に徳に報いると謂わんや。

心愠無為
此之長歌

心愠れども為す無く
此に之れ長歌す。

【校勘】○董…北山写本は「薫」に誤る。

【注】○兄也撰辞…『大阪訪碑録』（浪速叢書一〇）（浪速叢書刊行会、一九二九年）に実相寺の五井蘭洲の墓碑文がある。末尾に、「中井積善撰　弟積徳書並篆額」とある。また、『奠陰集（文集）』巻三（影印本四八頁）に「祭蘭洲五井先生文」（宝暦十二年（一七六二）、竹山三十三歳）がある。また、同巻（影印本五五頁）に「蘭洲先生墓表」（宝暦十三年（一七六三）五月）も題のみ記されている。

【訳】甲申の歳（明和元年（一七六四））、三月十五日、私のかねての嘆きにため息をつき、徒歩で南に向かった。喧しい町中を過ぎ、青々と広がる郊外の野に臨んだ。朝の景色は寂しげで小雨が降り、私の衣を濡らす。鳥の声の中、花びらが静かに散り、鐘の音が聞こえる（割って入る?）。寺院が連綿と続き、墳墓が重なり合う。人生が短いことは知っていたが、これまで振り返る余裕がなかった。連なる甍が高く聳えるのを見る。死生は昼夜のようにはかないのに追い求め、旗を奪い合い（権力闘争

し）、奔走するようだ。独り行けば感じやすく、気持ちがふさいで行きなずむ。ようやく実相寺の丘に上り、苔むす墓に参り掃除する。これが先師の幽室だ。お声とお姿とを思い出して涙を流す。時間が速やかに過ぎるのを嘆くうちに、三回忌がもうすぐ来る。先師の学を継ぐ者はなく、誰がその徳を頌え事跡を記そう。弟子と旧友は、涙を拭って相談した。〔結果〕我が兄弟は、久しく学問しかつ文才があるとのことで、兄が文辞を撰し、弟が文字を書いた。よくよく考え、遂に念願を遂げた。墓石を買って石工に命じ、よくよく相談し、墓碑はけっこうに

五井蘭州墓

五井蘭州の墓のある実相寺の門（上本町）（二〇〇八年四月一九日 著者撮影）

仕上がった。この時、墓標を建てて、土を固め、築き上げた。その周りに棘をめぐらせ、麗しい花の木を植えて、あたりを照らした。かの人は玉のようなお方だった。衣服を正して拝礼し、衷情を傾けて我が思いを訴える。ああ、民が三界（迷い多きこの世）に生まれるや、私独りが在野に埋没し（隠れ）、病気も癒えず、さらに師の逝去に遭遇し、心が揺れ動き落ち着かない。どうして私の人生には障害が多いのだろう。悲しみ嘆き思い悩む。師の声が私を導き、心に遵守することを誓う。〔だが〕どうしてその徳に報いると言えようか。腹立ちを感じながらどうすることもできず、ここにこの長歌を賦した。

錦雉賦

＊錦雉は、おそらくはキンケイ（口絵2参照）。博物学史上の資料としても重要。特に、履軒の描写は注目に値する。

夫羽族之多類、固紛綸*難窮譬*。或因徳賞、或以才媚、或懐臭味而登俎、或籍文章兮飾君子之儀、簡冊所記、挙不可備。

我観錦雉之状、実雉而錦文、朱身輝兮孔陽、翠翰*翩其琅玕*、金線環頸而婆娑*、頂糸厖其如弁。是其概而可言者。若夫五采相繆*、鬱郁*縟以繽紛*、糾錯*如綺、比連如淪、如画如刻、如貝如鱗、則目不可究察焉、矧口可得談哉。洵羽族之鍾美、豈孔翠之足論。我独傷其離故土而飄零也、撫籠而唁之、因称曰、

夫れ羽族の類の多きは、固より紛綸として窮譬し難し。或いは徳に因りて賞され、或いは才を以て媚び、或いは臭味を懐きて俎に登り、或いは文章を籍りて君子の儀を飾り、簡冊記する所、挙げて備うべからず。

我 錦雉の状を観るに、実に雉にして錦の文、朱身 輝きて孔だ陽らかに、翠翰 翩として其れ琅玕たり、金線頸を環りて婆娑たり、頂糸 厖として其れ弁の如し。是れ其の概ねにして言うべき者なり。若し 夫の五采 相い繆り、鬱郁として縟として以て繽紛たり、糾錯すること綺の如く、比連すること淪の如く、画の如く刻するが如く、貝の如く鱗の如きは、則ち目究察すべからず、矧や口 談ずるを得べけんや。洵に羽族の鍾美にして、豈に孔・翠の論ずるに足らんや。我 独り其の故土を離れて飄零するを傷み、籠を撫して之を唁み、因りて称して曰く、

嗟爾遐産於海表之国　　嗟 爾 遐く海表の国に産し
娟妙姿兮自累重　　娟なる妙姿を自ら累重し
凌波濤兮万里　　波濤を万里に凌え

淹萍跡于茲邦　萍跡を茲の邦に淹む。
祈愛顧乎通人　愛顧を通人に祈り
寄微命於樊籠　微命を樊籠に寄せ
木葉飄兮秋風　木葉 秋風に飄い
気凛々兮寒空　気 寒空に凛々たり。
望家山兮引領　家山を望みて領を引くも
雲千重兮万重　雲は千重に万重たり。
恋旧林兮抗音　旧林を恋い音を抗くするも
誰其察爾之恫　誰か其れ爾の恫みを察せんや。
楚囚之悲兮　楚囚の悲しみなり。
胡爾無辜而遭斯憫凶　胡んぞ 爾 辜無くして斯の憫凶に遭う。
於是雉方歩玉趾峩金弁　是に於いて雉 方に玉趾を歩み金弁を峩て
揺揺觜而啄黄粒　揺揺觜を揺らして黄粒を啄むに
聴斯言也　斯の言を聴くや
載勃々*而業々*　載ち勃々として業々とし
鼓翼而徐進　翼を鼓して徐ろに進み
復顧而却立　復顧し却立し
若欲語而不能　語らんと欲して能わざるが若く
似将辨而弗及　将に辨ぜんとして及ばざるに似たり。

噫*我知之　噫 我 之を知れり。
吾過矣吾過矣　吾 過れり 吾 過れり。
今夫貴遊之門　今 夫の貴遊の門
素封之家　素封の家
宝遠物而胥傚　遠物を宝として胥い傚い
尚異物而相誇　異物を尚びて相い誇り
畜錦雉者　錦雉を畜うる者
豈翃十百数　豈に翃だに十百数ならんや。
胡海外之貢　胡んぞ海外の貢ぎ
若斯之繁且多　斯くの若く繁く且つ多きや。
故踰海之禽　故に海を踰ゆるの禽
於今為曽為祖　今において曽と為り祖と為り
而今之所有　今の有る所
咸卵翼*於樊籠之中者　咸な樊籠の中に卵翼する者にして
條桷為山兮　條桷を山と為し
竹欄為林　竹欄を林と為し
板屋為蒼穹兮　板屋を蒼穹とし
頃歩之地為平原　頃歩の地を平原と為し
一勺盤水兮　一勺の盤水を
為澗谷源泉　澗谷の源泉と為し
曽無家山兮可望　曽て家山の望むべき無く

又無旧林兮*可恋
宜也乎怪於吾斯言矣

嗟爾之為生
肉臭腥兮不可食也
声喔咿*兮不可聴也
既無徳可称兮
又無聡慧之性
徒以采色兮媚嫵於人
而不足以飾儀表兮壮観望

独拘囚於犴狴*兮
載揚々以為性所然

弗悟野禽肥乎得意
翻慍怒乎仁人之言
信可哀而憫
雖然爾微物也已
我又安知無人而類斯禽焉哉　我又た安んぞ
　　人にして斯の禽に類する無きを知らんや。

又た旧林の恋うべき無し。
宜なるかな　吾が斯の言を
　　怪しむは。

嗟爾の生為るや
肉臭腥にして食らうべからず
声　喔咿として聴くべからず。
既に徳の称すべき無く
又た聡慧の性無く
徒らに采色を以て人に媚嫵し
　儀表を飾るを以て
　　観望を壮んにするに足らず

独り犴狴に拘囚さるるも
載ち揚々として
　　以て性の然る所と為し

野禽の意を得て肥ゆるを悟らず
翻りて仁人の言に慍怒す。
信に哀れみ憫れむべし。
然りと雖も爾微物なるのみ。

【校勘】○噫…「嘻」を消す。○兮…手稿本では、「兮」を「可」に直しているようだが、諸本により「兮」が適当であると判断した。

【注】○紛綸…多くて乱れること。○窮譬…譬は説明するの意。○翠翰…翰は羽の意。○琅玕…美しい様。○婆娑…舞う、ゆったりする。○繆…合わさる。交わる。○鬱郁…綾が盛ん。○繽紛…乱れる様。○糾錯…もつれる。○勃々、業々…ともに盛んな様、動く様。○卵翼…はぐくみ育てる。○喔咿…鶏などの鳴き声の擬態。○犴狴…牢獄。

【訳】そもそも鳥類の種類の多さは、もとより様々であって窮めがたい。品が良いことをもって称されるものもあれば、人に媚びる才能のあるのもあり、独特の香りにより食に供されるものもあり、きれいな文様で飾りに使われるものもあり、書物に記載されるものは、枚挙に暇がない。

　私が金鶏の様子を見ると、まことに雉であり、錦の文様があり、朱色の体は明るく輝き、翡翠色の羽（＊翡翠色は青緑だが、実際のキンケイの羽は主に青色）美しく翻り、金色の線が首を巡って舞い、頭上の羽が豊かでとさかのようだ。表現できる概略は以上のようである。五

色が混じり合い、様々に綾を織りなし、さざ波のように連なり、絵のようでもあり鱗のようでもあり彫刻のようでもあり、螺鈿のようでもあるのは、目で窮めることもできないし、まして口で表現することもできない。まことに鳥類の美の粋であり、孔雀や翡翠も論ずるに足るまい。私は、ひとり、その故郷を離れて落ちぶれたのを傷み、籠を撫でてこれを慰めて言った。

ああ、お前は遠く海外に生まれ、艶やかなる姿を患いとし(?)、万里に波濤を越えて、この国に漂うことになった。風流人（趣味人）に可愛がられることを祈り、はかない命を籠に寄せ、木の葉は秋風に漂い、空気は寒空に凛々とする。故郷の山を望んで首を伸ばしても、雲は幾重にも重なる。故郷の林を想い声を上げても、誰がお前の傷みを察しようか。他国に囚われた者の悲哀である。どうしてお前は罪なくしてこのような憂き目に遭うことになったのか。

この時、金鶏はちょうどそのおみ足を歩ませ金色のとさかを逆立て、玉のようなくちばしを動かして雑穀を啄んでいたが、私の言葉を聞くと、さかんに動いて、翼をばたつかせておもむろに進み出、振り返り退いて立ち(私を何回も見て姿勢を正して立ち?)、何かを言おうとして言えない様子であった。

キンケイ

ああ、私にはわかった。私の間違いであった。今、あのお金持ちの方々は、遠くの物を宝として、珍しい物を尊んで競いあっており、金鶏を飼う人も少なくはない。どうして海外からの貢ぎ物がこのように頻繁で多いのであろうか。そこで、海を越えて来る鳥は、それが祖先となり、今いる鳥は、すべて籠の中で生まれ育ったもので、止まり木を山だと思い、竹柵を林だと思い、板葺きの家を大空だと思い、わずかばかりの土地を平原だと思い、一掬いの鉢の水を谷の泉と思い、望むべき故郷の山もかつてなく、また懐かしむべき故郷の林もない。どうりで私の言葉を怪しんだはずだ。ああ、お前の生態は、肉は臭くて食えず、声はギャーギャーと聞くに堪えず、称えるべき徳もなく、聡明な性質もなく、いたずらに美しい容姿をもって人に媚び、〔かと言って〕儀式の飾りとしてその雰囲気を厳かにすることもできず、ひとり牢獄に閉じこめられながら、意気揚々とこのようなものだと思い、野生の鳥が意を得て健康に過ごしているのを知らず、かえって思いやりある人（＊履軒自身のことを言うのであろう）の言に憤慨する。まことに憐れむべきことだ。だが、お前は畜生に過ぎない〔だから許そう〕。人でこの鳥のような者がいないと誰が知ろうか。

【参考】江戸時代におけるキンケイ

磯野直秀『日本博物誌年表』（平凡社、二〇〇二）によれば、江戸時代にはキンケイが頻繁にもたらされ、飼育されたり、見せ物になったりしていた。同書により、キンケイに関わる主な記述を整理してみると、以下のようになる。

キンケイは、早くに、慶長一五年（一六一〇）に献上記録が見え、水戸光圀が飼っていたという記録もある（元禄一三年（一七〇〇））。宝永二年（一七〇六）には玩弄のための鳥の飼育が禁じられたが、唐鳥は輸入され続け、宝永三年（一七〇七）にもキンケイがもたらされたとの記録がある。享保二年（一七一七）には四条河原でクジャクやキンケイが見せ物になっていた。そして、宝暦八年（一七五八）夏には、大坂の道頓堀で珍鳥の見せ物が開かれ、ここでもキンケイは見られた（『摂陽奇観』）。これは、もとは高槻藩主永井直行侯の愛鳥であった。安永二年（一七七三）、城西山人巨川著『唐鳥秘伝百千鳥』にはキンケイの飼育に成功していた記述がある。寛政一二年（一八〇〇）には江戸浅草・両国、大坂下寺町、名古屋末広町などに、人寄せに珍鳥を飼う孔雀茶屋ができ、ここでもキンケイは見られた（大田南畝は享和一年（一八〇一）、大坂の孔雀茶屋でキンケイを見ている）。

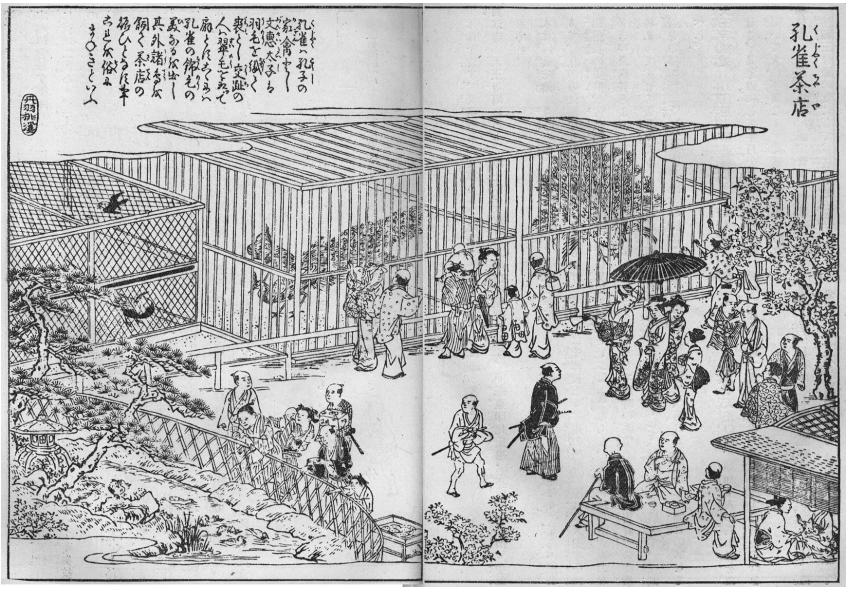
なお、孔雀茶屋の様子は、『摂津名所図会』巻二にある（下図参照）。そこには以下のように書かれている。

「孔雀は、孔子の家禽とし、文恵太子は羽毛を織て裘とし、交趾の人は翠毛を取って扇とす。ここには孔雀の錦毛の美なるを出し其外諸鳥を飼て茶店の賑ひとなす事これを俗にまねきといふ」

その他、井原西鶴『好色五人女』（一六八六）巻五「もろきは命の鳥さし」に見える（「その奥に庭籠ありて、はつがん、唐鳩、金鶏、さまざまの声なして…」）。また、『百千鳥』『飼鳥必用』には飼い方が紹介されている（『古事類苑』による）。

また、『国立国会図書館月報』二〇〇八、四（No.565）表紙に、『梅園禽譜』（天保一〇年（一八三九）序）の美しいキンケイ図が見える（「鷩雉」と題されている）。

なお、履軒の時代、大坂船場の八百屋町筋には鳥を扱う商人が多く、鳥屋町筋とも呼ばれたと言う（秋里籬島著、竹原春朝斎画『摂津名所図会』（寛政八年（一七九六）、十年（一七九八））（七八頁図参照）。そこには以下のように書かれている。



孔雀茶屋の様子（『摂津名所図会』巻二）

「孔雀、風鳥、音呼鳥、金鶏、あるは林泉に田鶴の放し飼、鴛鴦、水鶏も遠く飛ざるやう自在に育て、これを賈ふなり。鸚鵡に言せて来客をもてなさするもおかしきの業なるべし」（巻四「八百屋町飛禽店（やおやまちとりみせ）」）

【参考】キンケイの名称

『日本国語大辞典』では、キンケイの和名として「にしきどり」を挙げる。おそらく、江戸時代は一般にこう呼ばれていたのであろう。一方、『和漢三才図会』巻四二「原禽類」や、小野蘭山『重訂本草綱目啓蒙』巻三二「原禽」では、キンケイの名称（別名）として、「山鶏」「錦鶏」「金鶏」「采鶏」「鷩雉」「鶏鬟」など多くの漢名が挙げられているが、いずれにも履軒の「錦雉」は見えない。履軒は事物の名称にこだわりを持ち、自ら新しい命名を試みることもあった（拙稿「中井履軒の名物学―その『左九羅帖』『画觿』を読む」「中井履軒『左九羅帖』『画觿』本文・注釈」（ともに武田科学振興財団杏雨書屋編『杏雨』一一号、二〇〇八年　所収）を参照されたい）。「錦雉」もおそらくは履軒が考え出した名称なのであろう。

＊その他、菅原浩他編『日本鳥名由来辞典』（柏書房、一九九三）にも「錦雉」の名は見えない。

大坂船場の八百屋町筋　飛禽店（『摂津名所図会』巻四）

書寧静舎壁示諸子（寧静舎の壁に書し諸子に示す）

＊寧静舎は懐徳堂の学寮の名。これは、竹山が一年間京都の西岡に行き、履軒が校務を執った時の作と言われている（加地伸行編『中井竹山・中井履軒』一九二頁）。

盈々白露下　盈々たる白露の下
啾々冷風来　啾々として冷風来たる。
沈々天色浄　沈々として天色浄く
草木凄其衰　草木 凄として其れ衰う。
風光如逝川　風光は 逝く川の如く
情愕更若疑　情 愕として 更に疑う若し。
諸君何為哉　諸君 何為れぞ
負笈茲相随　笈を負いて 茲に相い随う。
既無塵慮雑　既に塵慮の雑す無く
又絶室家累　又た室家の累いを絶つ。
如今不努力　如今 努力せずんば
悠悠待何時　悠悠 何時を待たん。
水流不可挽　水流れれば 挽くべからず
時去不可追　時去れば 追うべからず。
青年能幾日　青年 能く幾日ぞ
白頭徒懐愧　白頭 徒らに懐愧す。
太息長太息　太息し 長く太息す
為之者誰居　之を為すは誰ぞや。
酣歌聖所戒　酣と歌と 聖 戒むる所
玩好儆喪志　玩好 喪志を儆む。
況敢弗顧矱　況んや 敢えて矱を顧みざるをや
豈遑提爾耳*　豈に爾が耳を提ぐるに遑あらんや。
勧君青燈下　君に勧む 青燈の下
他事毋歴思　他事 歴思すること毋かれ。
言言爾薬石　言言 爾が薬石
語語爾老師　語語 爾が老師。
降心其玩索　心を降し 其れ玩索し
強聒*靡用為　強聒 用て為すこと靡かれ。

【注】○提爾耳…「提耳」は懇ろに諭し教えること。『詩経』「大雅」「抑」に見える。○強聒…かまびすしいこと。学舎の名（寧静）通り、静かにしろというのだろう。

【訳】満ち満ちた白露の下、ヒューヒューと冷たい風が吹く。天は澄み渡り、草木は萎む。時間は流れ行く川のようで、〔その早さに〕驚き、〔本当かと〕疑うほどだ。諸君は何のために、書箱を負って〔はるばる遠く〕ここに集まったのか。すでに雑事に心乱されることもなく、また家庭の煩いもない。今、努力しなければ、ぐずぐず

と何時を待つのか。水は流れると引き戻すことができない。時は去ると追いかけることができない。若い時はどれほどあるだろう、白髪になっていたずらに後悔する。ため息をつきまたため息をつく。そうなるのは誰か。飲酒と歌とは聖人が戒めるところだ。〔また〕器物をもてあそんで精神を乱すこと（玩物喪志）を戒める。まして、規則（学則か）を顧みないことは、どうして、懇ろに教え諭す暇があろうか。君たちに勧める。灯りの下、他のことは妄りに考えるな。すべての言葉は君たちの薬だ。すべての語が君たちの先生だ。謙虚に熟読熟考し、声高に説くことなかれ。

甲申歳晩自叙

＊甲申は明和元年（一七六四）。歳末に自らの思いを吐露した詩。

歳晏人事休　　歳晏　人事休み
対酒聊自叙　　酒に対して聊か自ら叙ぶ。
軒冕*非吾事　　軒冕は吾が事にあらず
琴書性所娯　　琴書は性　娯しむ所なり。
且欣無知己　　且つ知己無きを欣び
囂々*守窮廬　　囂々として窮廬を守る。
八紘入胸襟　　八紘　胸襟に入り
俛仰*得我所　　俛仰に我が所を得。
刺字*久已漫　　刺字　久しく已に漫れ
簡牘不出戸　　簡牘　戸を出でず。
豈乏縫腋*士　　豈に縫腋の士に乏しからんや
志尚異所趨　　志尚　趨く所を異にす。
退蔵日加慎　　退蔵し　日々慎を加え
避名若蝎蛇　　名を避くること　蝎蛇の若し。
問我奚為然　　我に問う、奚んぞ然りと為す
請看蕩々*者　　看るを請う　蕩々たる者を。
秖怕浮名伝　　秖だ怕る、浮名の伝わり
偶在指頭伍　　偶々指頭の伍に在るを。

【注】○軒冕…高官のこと。○囂々…自得の様。○俛仰…伏したり仰いだり。日常の起居動作を言う。○刺字…「刺字漫滅」で、久しく人付き合いをしないために名刺の字が読めなくなること。○縫腋…上官の衣。○蕩々…『論語』述而篇に「君子坦蕩々、小人長戚々」とある。

【訳】年の暮れ、仕事を終え、酒に向かっていささか自分のことを述べる。宮仕えは私の仕事ではなく、琴と書物とが好むところだ。かつ、知己のいないのを喜び、平然とみすぼらしい庵を守っている。宇宙を我が物とし、

起居に我が所を得たりとする。名刺も〔使わないため〕字が読めなくなり、手紙のやり取りもない。どうして地位の高い人がいないであろうか。〔ただ〕目指すところが違うだけだ。引退して日々謹慎し、名が知れることを蛇蝎の如く避ける。私に尋ねる、どうしてそうなのだ、と。見てください、あのゆったりした人を。〔彼らは〕ただ名前が空しく伝わって、五本の指に入る（有名になる）ことだけを怖れているのだ。

孝思詩三首

＊稲垣子華の孝養を称えた詩、子華（一七二三～一七九七）は、美作出身の懐徳堂門人。安志藩に仕えたが、親の介護のために仕事を辞し、宝暦十三年（一七六四）に孝子として幕府から褒賞を受けた。この作品はその時の作。『履軒古風』巻三に、子華を詠い本人に贈った「招隠士」（贈稲垣子華）と「席上贈稲垣子華」が見える（帰坂（一七六七年）後すぐ、履軒三六歳、子華四四歳の作）。なお、「招隠士」は『楚辞』に同名の賦がある。

克孝維人　百行攸基
維伊稲生　洵是孝思

克く孝たり 維の人
百行 基づく攸。
維だ伊れ 稲生
洵に是れ 孝思。

童丱離郷　裹粮尋師
我考是師　誘以孝弟
服膺弗爽　学優而仕
資事公卿　順徳攸比
親老無養　逖労其思
愾焉永歎　盍帰乎来

童丱にして郷を離れ
粮を裹みて師を尋ぬ。
我が考は是れ師たりて
誘うに孝弟を以てす。
服膺して爽わず
学 優れて仕う。
公卿に資事し
順徳は 比しむ攸なり。
親老いて養なう無く
逖かに其の思いを労す。
愾焉として永歎す
盍ぞ帰りて来たらざる、と。

云旋云帰　薄田二頃
執彼耒耜　蓺茲黍＊梁
稲梁生矣　莠稂＊盛矣
蓬髪鶉衣　帯経而耡
既饑且渇

云に旋り云に帰るも
薄田二頃のみ。
彼の耒耜を執り
茲の黍梁を蓺う。
稲梁生じ
莠稂盛んなり。
蓬髪鶉衣にして
経を帯びて耡く。
既に饑えて且つ渇くも

子職靡堕　　子の職 堕すること靡し。
上堂奉親　　堂に上り親に奉ずるは
維魚暨脯　　維だ 魚暨び脯なり。
酒醴*是承　　酒醴 是れ承くるは
維子暨婦　　維だ 子暨び婦なり。
左之右之　　之に左し之に右し
嬉々其娯　　嬉々として其れ娯しむ。ましむ？
眉寿*永年　　眉寿は永年
靡知憂虞　　憂虞を知る靡し。

厥徳升聞　　厥の徳 升り聞こえ
旌典是膺　　旌典を是れ膺く。
大君有命　　大君 命有り
錫爾十朋　　爾に十朋を錫う。
俾爾終養　　爾をして養うを終うるまで
無不充矣　　充てざる無からしむ、と。
友朋咸喜　　友朋咸な喜び
如躬受賜　　躬ら賜を受くるが如し。
幽人積徳　　幽人積徳
式作此詩　　式て此の詩を作り、
遥貽稲生　　遥かに稲生に貽り
称颺其美　　其の美を称颺し、
以伝四方　　以て四方に伝え
俾民興起　　民をして興起せしむ。
我聞古訓　　我 古訓を聞く
孝子不匱*　　孝子 匱しからず、と。

（稲垣子華、名隆秀、美作人。）

【校勘】○黍…「稲」の上に「黍」と書く。

【注】○莠稂…ユウロウ。雑草。『詩経』「小雅」「大田」に「不莠不稂」とある。○酒醴…醴は甘酒。○眉寿…老人のこと。『詩経』「豳風」「七月」に見える。○孝子不匱…『詩経』「大雅」「生民之什」「既醉」に「孝子不匱、永錫爾類」（孝子匱しからず、永く爾の類を錫う）とある。ちなみに、履軒は豊後の孝女はつを称える文章を「錫類記」と名づけている。

【訳】
すばらしく孝行である、この人は。〔孝は〕百行の基礎である。
ただ、この稲垣生が、本当に孝行で親思いである。
幼くして故郷を離れ、糧を包んで師を尋ねた。
私の父がその師であり、孝悌の道で誘った。

慎んで心に銘記し違うことなく、学問は優秀で宮仕えした。
公卿を助け仕え、徳に親しんだ。
親が老いて養う者もなく、遥かに思いを馳せた。
長くため息をついて思った、どうして帰らないでおられようか、と

そこで帰ったが、痩せた田が二頃（＊一頃は百畝）あるのみ。
鋤を執って穀物を植える。
稲穂が生じても、雑草が生い茂る。
ぼさぼさ髪に粗末な服で、経書を片手に田を耕す。
飲食に不自由しても、子としての務めは怠らない。
座敷に上がって親に奉じるのは、ただ魚と干し肉だけだ。
酒や甘酒を承けるのは、ただ子供と婦人だけだ〔自分は口にしない〕。
親の側に仕え、嬉々として楽しんでいた。ませていた？
ご老人はずっと憂いというものを知らなかった。

その徳がお上に届き、表彰を受けた。
主君より命があった。お前に報奨金を賜う、
お前が孝を全うするのに必要なものはすべて与える、とのことであった。

友らは皆、自分が表彰されたかのように喜んだ。
世捨て人の私、積徳が、この詩を作り、
はるかに稲垣生に贈り、その美徳を賞揚し、
世の中に伝え、人民が感動し奮起するようにした。
古の言い伝えに言う、孝子は乏しくない、と。
（稲垣子華は、名は隆秀、美作の人である。）

【参考】

懐徳堂の孝子顕彰運動については、西村天囚著『懐徳堂考』下巻「好善の家風」（一九一一年）、加地伸行編『中井竹山・中井履軒』（明徳出版社〈叢書・日本の思想家二四〉、一九八〇年）第二章第五節「孝子顕彰運動」（小堀一正執筆）に見える。

なお、稲垣子華墓碑は、今も岡山県美作町田殿に存在する（『懐徳堂センター報』二〇〇五口絵参照）。竹山の子蕉園作の墓碑は以下のようである。

稲垣子華碑銘

寛政九年丁巳春正月六日、瀧嵓*先生稲垣子華諱隆秀卒于播、其弟子在作者三十餘人*、相會而哭、乃相議曰、「剖析周密以訓詁章句鳴焉者世或有之。高逸妍麗以辭賦文章鳴焉者亦或有之。矯揉自修僅得一節之長者寔蕃有徒*。夫温厚恭倹、博學篤行、能風化邦國、如

吾夫子粹而全者未之有也。吾夫子之德大矣哉。今也夫子捐我諸子、我諸子將安放*。盍碑于其故邑、擇諳夫子之悳行而文焉者而銘之、我諸子歲時拜薦有所適、後世子孫景慕者有所仰、不亦善乎。」乃使三宅生來請于余曰、「竹山先生向有孝狀之撰*、吾師之行事、於是乎詳矣。不可重煩先生。請子銘之。」余與生語、問之以其侍疾助葬之狀、則對辭愿款*、目潤色戚、追慕之誠、可掬也。則可以知其徒咸然也。亦可以想其後世子孫咸然也。夫子之遺愛何其深也。昔蔡邕*爲郭太碑文、謂其友曰、「吾爲碑文多矣、皆有慚德、唯郭有道*無愧色耳。」余於斯銘亦然。銘曰、

嗚呼夫子、何德之純。孝友其素、飾之以文。清約其守、能惠于人。學之斯優、内彼玄纁*。

有赫之都、肉粟*之郡。侯氏乃喜、台得藎臣*。士庶胥慶、戎有良翰*。父兮土思、不肯徙遷。

韌其迎養、歸養之牽。夫子曰噫、曷以官爲。言告侯氏*、言告言歸。厥養維何、其體其志。

厥業維何、其耒其耜。扇枕臥氷*、豈足專美*。炎畦霜疇、胼胝*其支。出酸處辛、其色有怡。

父兮安此、逸豫無期*。孝弟力田、邦家之本。王侯爲光、紛擧旌典。三命之俯*、德音*孔膠。

彼其丕蹟、胥則效矣。隣保之訛、覃及*邦陲。愛之愛之、愛莫助之*。日月已慆*、孝潰于成。

載栞載書*、韞其名聲。侯曰於戲、既畢爾志。勉爾遁思*、誨台赤子。夫子曰噫、我事全矣。

旧恩亦渥、豈有遐心*。乃眷東顧、往即前職。所居風草、民莫不穀*。

嗚呼夫子、何德之純。

濟濟多士*、莫之與倫。維時丁巳、何歲之厲。天不憖遺*、俾民亡師。

鄉人貿貿、如喪家狗*。仰歎俯泣、銜恤相訓*。我之無辜、夫子之故。拊我育我、我之父母。

再駕于播、俾我心苦。尚曰旋歸、豈遐棄*我。噫今若斯、云何其盱*。蒼天有命、斯謂之何。

乃石乃文、于彼田殿。以酌以羞*、歲時不倦。豈敢爲報、薄*以慰心。視死之日*、猶生之年*。

嗚呼夫子、何德之純。唯其純矣、是以有然。

大阪　中井曾弘撰并書

【解説】碑銘の作者は、中井曾弘、号蕉園（一七六七～一八〇三）。中井竹山の子。詩才に恵まれ、一晩で十篇の賦を書き上げた「一宵十賦」を残している。将来を期待されたが、三十六歳の若さで亡くなった。「子華碑銘」は、三十歳の時の作（寛政九年は一七九七年）。蕉園の詩文を集めた『塤集』にも見える。序と銘からなり、銘は、経書に出典を持つ四字句を連ねた荘重な文章である（注参照）。

【訳】

寛政九年（一七九七）の正月六日に瀧嵜先生稲垣子華、本名隆秀は播磨で亡くなった。美作にいる弟子三十人ほどは、集まって慟哭し、相談して言った。

「分析が緻密な儒教経典の注釈で世の中に知られた人はいるだろう。また、非凡で美麗な辞賦文章で知られた人もいるだろう。自制心を持ち勉学に励み一芸に優れる人は非常に多い。ただ、温厚で慎ましく、博学で篤行家で、国を感化することができるのが、我が師ほど純粋かつ完全な人は、いまだかつていなかった。我が師の徳はなんと偉大なことか。今、師は我々諸子をお捨てになった。我々はこれから何によったらよいのか。その故郷に碑を建て、師の徳行を覚えている者を選び、文章を作り銘に彫ればいいではないか。そうすれば、我々諸子は季節ごとの墓参に行く所ができるし、後世の子孫で敬慕する者も拝む所ができる。これはよいことではないか」と。

そこで三宅生を私の処に遣わして言った。「先に竹山先生に孝状をお書き頂き、我が師のこれまでの行いは、明らかになりました。再度先生を煩わせるわけにもまいりません。あなた様に銘を書いていただけないでしょうか」と。私は生と語り、看病や葬儀の助けた様子を尋ねた。答えは慎ましやかで、涙を浮かべ沈痛な表情であり、真心から師を追慕していることがよくわかった。よって、その弟子は皆そのようであることがわかるし、また、後世の子孫も皆そうであろうと予測できる。師の遺愛は何と深いことか。昔、蔡邕が郭太の碑文を作りその友人に、「私は碑文をたくさん書いたが、皆徳に不完全なところがあった。ただ郭有道だけは完璧であった」と言った。私がこの銘においてもその通りだ。銘に言う。

ああ師よ、何と純粋な徳をお持ちだったことか。
生まれながらに〔素地として〕孝徳を備え、〔加えて〕文才もお持ちであった。
謙虚で慎ましやかで、人には恵み深く、
学問は優れ、徳を蔵し、
都に名を馳せ、郡に招聘され、
国に忠臣が得られたと、領主はお喜びになり、
いい人が得られたと、武士や役人は喜んだ。
父上は土地にこだわり、引っ越しを承知なさらず、
迎えて養うことを拒まれ、帰って養うよう引かれた。
師は「ああ、どうして宮仕えしておられようか」とおっしゃい、
そこで領主に告げてお帰りになった。

注（宝暦四年（一七五四））

〔父上の〕お体とお心をお養いなさり、
畑仕事を生業とされた。
師のすばらしさは孝行だけではない。
炎暑厳寒の畑仕事で、手足はあかぎれだらけ。
〔でも〕いくら辛い思いをしても、微笑んでおられる。

父上はすっかりご安心なされ、心安らかに過ごされた。
孝行で友人にも親切で農業に勉めるのは、国の礎。
将軍様とご領主とは誇りとされ、表彰された。

注（明和元年（一七六四））

位が進んでもますます謙虚に、評判は揺るぎなきものとなった。
そのすばらしき行いを、役人は見習い、
村を感化し、さらに国の隅々にまで及んだ。
だが、いくらお慕い申し上げても事態をどうすることもできなかった。
歳月が経ち、孝行を遂げ（父上が亡くなり）、
琴を弾き、書を読み、名声を隠しひっそりと住まわれた。
ご領主がおっしゃった。「志を遂げられた（孝を全うされた）今、
ひっそりと暮らし、子弟の教育でもなさい」と。
師がおっしゃった。「私の仕事は全うしました。
厚くご恩を被っておりますのに、どうしてお忘れできましょう」と。
そこで、東に赴き、前職にお就きになった。
その地の民草は悪い者がいなくなった。
ああ師よ、何と徳の純粋なことか。
並みいる名士の中にも、これほどの人はいない。
ただ、丁巳という年は、何とひどい年なのだ。
天は強いて〔師を〕お残しになられず、民から師を奪われた。
里人は意気消沈し、家を失った犬のようだ。
仰いで嘆き伏して泣き、悲しみを抱いて互いに嘆き合った。
私が罪がない（正しくいられた）のは、師のおかげだ。
私を撫で育ててくださった、私の父母だ。
再び播磨へと赴かれ、私を悲しませた。
すぐに帰ってくるとおっしゃったのに、どうして遠く私をお棄てになったのか。
ああ、今このようになり、何を望めようか。
天には命があり、これをどうしようもない。
そこで、田殿に石碑を建て文を作り、
歳時怠らず酒と食物をお供え申し上げ、
報いとするには足りないが、せめて自らの慰めとする。
死を見ること、生のごとく〔少しも恐れず〕、
ああ、師よ。どうして徳がかくも純粋なのか。
ただ、純粋なゆえに純粋なのだ。

【注】○瀧嵓…「嵓」は「嶽（岳）」の異体字。故郷の田殿の清滝に因んでつけられた号。○三十餘人…碑の下部に名前が彫られている。『塤集』では「若干人」になっている。○寔蕃有徒…（『左伝』昭公二十八年「実蕃有徒」、『書経』仲虺之誥「寔繁有徒」）。○放…「よる」（『論語』里仁篇「放乎利而行多怨」）。○竹山・孝狀之撰…中井竹山に「稲垣子華孝状」（明和二年（一七六五）作）がある。○愿款…「ゲンカン」。慎み深くて誠があること。○蔡邕爲郭太碑文…（『後漢書』郭太伝、『高士伝』）。○郭有道…「有道」は挙士

科目の一つ。○玄纁…「ゲンクン」。黒い帛。人を招聘する際に用いるもの。ここでは、それに価する価値を言うか。○肉粟…食料。給料？（白居易『白氏長慶集』巻六五「七十三養老、在使之寿富貴」に「特頒其布帛肉粟之賜則謂養老之道尽於是矣」とあるのを参照）。○台得藎臣…「藎臣（ジンシン）」は「忠臣」（『詩経』大雅、文王）。○戎有良翰…「戎」は「なんじ」。「良翰」は才能のある人（『詩経』大雅、崧高）。○言告侯氏、言告言歸…「言」は「ここに」（語調を整える語、『詩経』によく見える）（『詩経』国風、周南、葛覃「言告師氏、言告言帰」）。○扇枕臥氷…「扇枕」は暑い夏に親の枕を扇いで涼しくすること。「臥氷」は王祥という人が、冬に親の好きな鯉を獲るため、臥して氷を解かしたこと（『搜神記』）。ともに、孝行を言う。○専美…美名を独占する（『書経』説命下、『書言故事』評論類、専美）。○胼胝…「ヘンチ」。あかぎれ。手のものを「胼」、足のものを「胝」という。○逸豫無期…十分に楽しむこと（『詩経』小雅、白駒）。○三命之俯…官位が進むに随って益々謙遜すること（『左伝』昭公七年）。○徳音…良い評判（『詩経』豳風、狼跋、邶風、日月）。○覃及…「タンキュウ」。及ぶこと（『詩経』大雅、蕩）。○愛莫助之…（『詩経』大雅、蒸民）。○日月已慆…「慆（トウ）」は「過ぎる」（『詩経』唐風、蟋蟀「日月其慆」）。○載栞載書…「載」は「すなわち」（語調を整える語、『詩経』によく見える）。「栞」は「琴」。弾琴と読書。ともに風流なもの。○勉爾遁思…「遁思」は世を遁れる意思（『詩経』小雅、白駒）。○遐心…「遐」は「遠い」。「遐心」は疎遠にする心（『詩経』小雅、白駒）。○不穀…「穀」は「善」。○濟濟多士…（『詩経』大雅、文王）。○慾遺…「ギンイ」。強いて残す（『詩経』小雅、十月之交「不慾遺」）。○喪家狗…家を失った犬（『史記』孔子世家）。○銜恤相訓…「銜恤」は「悲しみを抱く」（『詩経』小雅、蓼莪）。「訓（シュウ）」は「呪う」。○遐棄…遠く見捨てる。生者を後に残して人が死ぬこと（『詩経』周南、汝墳）。○云何其盱…「盱」は「望む」（『詩経』小雅、何人斯「云何其盱」）。○羞…食物をすすめ供える。○薄…いささか。○視死之日、猶生之年…『史記』蔡沢伝に「視死如帰、生而辱不如死而栄、士固有殺身以成名、唯義之所在、雖死無所恨」とあるのを参照。

西岡雑詩

＊西岡での静かな滞在を詠った詩。京都の西岡は、竹山や履軒の妻の実家の革嶋家の所在地。竹山は、明和元年（一七六四）、革嶋家の家事を整理するため、一年間西岡に滞在し、『西岡集』という漢詩文集を残している。

環舎千畝竹　舎を環る　千畝の竹
翠光撼几席　翠光　几席を撼（うご）かす。
幽斎一炷香　幽斎　一炷の香
中有独眠客　中に独り眠る客有り。

其二

暮烟籠竹樹
蛙鳴水声外
露牀夢亦幽
不復還城市

暮烟　樹に籠め
蛙は鳴く　水声の外。
露牀　夢亦た幽
復た城市に還らず

其三

玉女宵翺翔
遺却玳瑇簪
朝来行人得
尚帯雲髻沈

玉女　宵に翺翔し
玳瑇の簪を遺却す。
朝来たりて　行人得れば
尚お雲髻を帯びて沈む。

其四

褫繃戮龍児
龍児*鼎中泣
秖為貞節軟
甘心慘禍及

繃を褫きて　龍児を戮せば
龍児　鼎中に泣く。
秖だ貞節軟きが為に
慘禍及ぶに甘心す。

其五

竹芽烹初熟
村醪沽未還
先生興不舒
先齕両三環

竹芽烹えて　初めて熟すも
村醪　沽いて未だ還らず。
先生　興舒べず
先に両三環を齕む。

其六

為客在竹郷
日々林中行
林中斜々逕
唯有薫風清

客と為りて　竹郷に在り
日々　林中を行く。
林中　斜々の逕
唯だ薫風の清らなる有り。

其七

為客在竹郷
日々林中行
翠光透肌骨
冷然染衣裳

客と為りて　竹郷に在り
日々　林中を行く。
翠光　肌骨を透り
冷然として　衣裳を染む。

其八

為客在竹郷
日々林中行
興来一長嘯
上有戛玉声

客と為りて　竹郷に在り
日々　林中を行く。
興来たりて　一たび長嘯すれば
上に玉を戛らす声有り。

其九

為客在竹郷

客と為りて　竹郷に在り

饔飧*憑此君*　饔飧　此君に憑る。
久違腥膻気　久しく腥膻の気から違り
清瘦絶俗塵　清瘦　俗塵を絶つ。

【注】○龍児…龍雛でタケノコのこと。○饔飧…饔は朝食。飧は夕食。前出の「食板銘」を参照されたい。○此君…竹の異名。晋の王徽之が竹を指して「何可一日無此君（何ぞ一日も此君無かるべけん）」と言った故事に基づく。

【訳】

家を廻る広大なの竹林、その翠の光が机や席をうごめかす。
ひっそりとした書斎に一筋の香、その中に一人眠る客がいる。

（その二）

暮れの烟が竹林に立ち籠め、蛙は水の音の外に鳴く。
帳のない寝床で夢心地に幽玄を巡り、街中の喧噪を忘れ去る。

（その三）

天女が宵に舞い降りて（さまよって）、玳瑁の簪を忘れていった。
朝が来て通りがかりの人が見つけると、まだ雲のようなもとどりの形跡を残していた（玳瑁の簪とは、茶色の皮を被った竹の子か。それを朝だれかが掘ってきてくれた、そこにはまだ黒々と土がついている、か。沈は泥、雲髻は天女の黒々とした豊かな髪＝黒々と纏わりついている土の様子か？）

（その四）

皮を剥いで龍の子（タケノコ）を殺すと、龍の子は、鍋の中で泣く。
ただ貞節が不十分なために、このような惨禍の憂き目にあったのだ。

（その五）

筍が煮えて火が通ったが、村の濁り酒を買いに行った者はまだ戻らない。
先生は待ちきれずに、先にちょっとつまみ食い。

（その六）

竹の郷で客となり、日々林の中を歩く。
林の中の小径は斜めで、ただ清らかな風が吹く。

（その七）

竹の郷で客となり、日々林の中を歩く。
翠の光は肌にまで透き通り、冷ややかに衣裳を染める。

（その八）

竹の郷で客となり、日々林の中を歩く。
興に乗じて一節ぶつと、上で玉を鳴らすような声がする。

（その九）

竹の郷で客となり、毎食、この君（竹）に頼る。
久しく生臭物から遠ざかり、清らかに痩せて、俗塵を断つ。

送君彝之関東（君彝の関東に之くを送る）

＊竹山の門人である中村君彝（一七四〇～一七八二）の送別詩。君彝は履軒の後妻（安永八年（一七七九）再婚）の兄。名は有則。号は出身地の平野郷から見える二上山に因み両峯と言う。明和三年（一七六六）の履軒京都行の際、同時に白木屋に仕えに行ったこともある。『履軒古風』巻三にも「春夜小集似君彝」と題する詩が、巻四に「清虚館小集呈君彝」と題する詩がある。この詩の関東行はおそらく明和二年（一七六五）。竹山『奠陰集（詩集）』巻二に、明和二、三年（一七六五、六）の作だと思われる「君夷告別之江都、聞先到京師留宿子甚家、辨行事而後発、故追寄此」という詩がある（影印本三〇〇頁）。『奠陰集（文集）』巻四には、明和三年（一七六六）作の「送中村君彝之江都序」がある。

臨別問帰期　　別れに臨みて　帰期を問う
帰期不可久　　帰期　久しかるべからずと。
君言跋渉艱　　君は言う、跋渉艱く
且避煩熱時　　且く煩熱の時を避けん、と。

東土多士叢　　東土　士叢多く
英華繽紛紛　　英華　繽紛紛たり。
況君芝蘭姿　　況んや君が芝蘭の姿
翩躚往其間　　翩躚して　其の間に往くをや。
相得且歎晩　　相い得て　且つ晩きを歎き
牽衣投君轄＊　　衣を牽きて　君が轄を投ぐ。
離別原太苦　　離別　原より太だ苦しけれども
新交更難割　　新交　更に割き難し。
偏恐三秋天　　偏えに恐る　三秋の天
空見鴻雁来　　空しく鴻雁の来たるを見るを。
所頼在感情　　頼る所は　感情に在るも
気象日推移　　気象　日々推移す。
蓴鱸＊此地多　　蓴鱸　此の地多く
秋風入君懐　　秋風　君が懐に入る。
去々千里羈　　去々　千里の羈よ
霧露＊慎興寝　　霧露　興寝に慎め。
分手意黙々　　手を分かつに　意黙々たり
相顧更一言　　相い顧みて　更に一言す。
東土雖楽矣　　東土　楽しと雖も
海上有故人　　海上　故人有りと。

【注】○投君轄…投轄は、車のくさびを井戸の中に投ず

る意。客を愛して強いて帰れなくすること。○蓴鱸…蓴羹鱸膾の略。ジュンサイの羹（あつもの）とスズキの膾（なます）。晋の張翰はこの二つの故郷の名産を味わおうと官を辞して帰郷した（『晋書』文苑伝、張翰伝）。後、故郷を思う情を言う。○霧露…病気のこと。

【訳】

別れに臨んで帰る時期を尋ねる、遅くなってはいけないよと。

〔すると〕君は言う、山を越え川を渡るのは大変ですよ、当分は暑い時期を避けます、と。

関東は名士が多く集まっており、花が咲き誇っている。

まして君の芳しい姿が、その中で軽やかに飛び回ればどうであろう。

知り合いになるのが遅かったと嘆き、君の衣を引いて留めるであろう。

別れはもとより苦しいものだが、新しい交わりはさらにそうだ

〔以上のようなことから〕私が心配するのは、秋になって、雁だけ帰ってくる（君は帰ってこない）ことだ。

頼りとするのは感情だけだが、それも日々移り変わる。

おいしいものはこの地に多く、秋風が君の懐に入れば思い出すだろう（？）

行け、千里の旅人よ。起き伏しに病気には気をつけよ。

別れに際して、気持ちは晴れないが、振り返って一言だけ付け足す。

関東が楽しくても、大阪に友人がいることを忘れるなよ、と。

臥龍賛

＊在野にありながら才能を有していた諸葛亮を賛美する詩。

瓊玉為質、蕙蘭*為衣、布衣之賢、王佐之才。三代之下、吾見若人、偉矣哉。所以臥草廬而龍名*、駕軽軒而虎威、翼微君於泥中、峙鼎足于西陲、粲然王政、永観遺愛。斯人而寿、事未可量知矣。非天下之奇才、其孰能之。嗟夫拠時言之、公之業可謂大成也。而公之志則弗遂、命矣哉。即以不能混一寰宇而疚公者、曽不読史矣。

【注】○蕙蘭…香草。香草で人を称えるのは『楚辞』などによく見える。○龍名…諸葛亮が臥龍と呼ばれたことを指す。

【書き下し文】瓊玉を質と為し、蕙蘭を衣と為し、布衣

の賢にして、王佐の才あり。三代の下、吾若の人を見るに、偉きかな。所以に 草廬に臥して龍の名あり、軽軒に駕して虎の威あり、微君を泥中に翼け、鼎足を西陲に峙して、王政を粲然たらしめ、永く遺愛を観す。斯の人にして寿ければ、事 未だ量り知るべからず。天下の奇才に非ざれば、其れ孰か之を能くせん。嗟 夫れ時に拠りて之を言えば、公の業 大成と謂うべきなり。而して公の志は則ち遂げざるは、命なるかな。即し寰宇を混一する能わざるを以て公を疚む者あれば、曾て史を読まざるなり。

【訳】宝石のような性質を持ち、香草を衣服にし、平民の賢人にして、王を輔ける才能があった。夏殷周の三代以降では、この人を見るに、実に偉大であると言える。そこで、草の庵に住んで臥龍と呼ばれ、軽い車を操って猛虎の威力があり、危うい主君を泥の中から救い、西のはしに三国を鼎立せしめ、王政を輝かせ、長く遺愛を示した。もしこの人が長寿を全うしたら、事態はどのようになっていたか計り知れない。天下の奇才でなければどうしてこのようなことができたであろうか。ああ、当時の状況を考えれば、公の業績は偉大だと言うべきである。だが公の志が遂げられなかったのは、運命だ。もし、天下を統一できなかったことで公を責める人がいるとすれば、〔その人は〕歴史を読んだことがない人である。

通天橋*霜樹

*京都の東福寺の紅葉を詠う（口絵3参照）。

彩霞染衣澗辺　彩霞 衣を染む澗の辺
明錦満目崖上　明錦 目に満つ 崖の上。
青樽*欲開何処　青樽 何処に開かんと欲して
躊躇魚炙熊掌*　躊躇す 魚炙と熊掌と。

【注】○通天橋…通天橋は京都の東福寺にある橋廊。紅葉の名所として今も有名。○青樽…清樽。清酒を入れた樽。○魚炙熊掌…焼き魚と熊の掌。美味の代表。『孟子』告子上篇に、生命と道義の両方を取ることはできないことを言う譬えとして、「魚我所欲也、熊掌亦我所欲也。二者不可得兼。舎魚而取熊掌者也。生亦我所欲也。義亦我所欲也。二者不可得兼。舎生而取義者也」と見える。

【訳】谷川のほとりで艶やかな霞が衣を染め、崖の上ではまばゆい錦が目一杯に広がる。酒樽をどこで開けようかと考え、酒の肴を何にしようかと悩む。

巻二

巻二は、三十五歳の時の京都行に関する作品を収めており、基本的に『洛汭奚囊』と重なる。その全文の翻刻、訳注は拙稿「『洛汭奚囊』―中井履軒の京都行」（『懐徳堂センター報』二〇〇四）において紹介した。同稿において、『洛汭奚囊』と『履軒古風』巻二との異同を以下のように述べた。

・『洛汭奚囊』になく『履軒古風』巻二にあるもの…「離恨」「読王祥伝」

・『洛汭奚囊』にあって『履軒古風』巻二にないもの…「離席、奉答伯兄」「既上舟、奉寄伯兄（三首）」「雪朝奉呈菅公」「丁亥早春自帰省浪華至、題所携梅花、上菅公」「碧山楼陪菅公賦奉酬」「遊高台寺」「答士誉　其二、其三」「九月十三夜」「南帰途中口号　其二」（最後の詩）

・『洛汭奚囊』との文字の異同

＊「永輔義佐寄酒鶏子来、題簡背謝之」→「早原寄酒鶏子来、題簡背謝之」

＊「述客中況、答早士誉」「憶旧遊寄早士誉」の「早」なし。

＊「川上習之」の「川上」なし。

以下、『洛汭奚囊』にない二作のうち、上記拙稿で紹介しなかった「読王祥伝」を紹介する（九七頁）。また、「はじめに」で述べたように、履軒の草稿であると思われる新田文庫『履軒古風』（E138）との異同を述べたい。履軒の創作過程がよくわかるからである。また、上記拙稿における誤植も、お詫びし訂正したい。

【誤植】

五一頁上段一〇行目、下段二行目、一四行目、五二頁上段一二行目

『奠陰集（詩集）』巻三→『奠陰集（詩集）』巻二

五二頁　四、「到京、奉寄伯兄」詩（其二）

我身→吾身　〔書き下し〕我が身→吾が身

五六頁　一〇、「羈鳥辞」

以和→以相和　〔書き下し〕以て和す→以て相和す

五七頁　一二、「偶成」

簡篇→簡編　〔書き下し〕同上

六四頁　二〇、「鴨林納涼」

溪林→溪水〔書き下し〕同上
〔訳〕川辺の林→川の水

六七頁「歎拘」
植表而推秋／毫弗遁兮→植表而推／秋毫弗遁兮
〔書き下し〕植表し推秋し／毫も遁わざれば
→表を植て推し、／秋毫も遁わざれば

六七頁「歎拘」
有微有悪→有嫩有悪
〔書き下し〕微しき→嫩き
〔訳〕卑しいのも良くないのもあるが
→良いのもあれば悪いのもあるが

七一頁「九月十三夜」
不再来→不再求
〔書き下し〕再びは来ず→再びは求めず

【文字の異同】（＊履軒草稿→『洛汭奚囊』）

二、
五〇頁　席上→離席

三、
五一頁　自咲→自笑
五一頁　休憂阿徳貧、貧時即是福（自無塵縄縛）→休憂阿徳貧、自無塵縄縛（＊竹山『奠陰集（詩集）』巻二の引用は「休愁阿徳貧、貧時即是福」）

＊定稿では「心配しないでください。貧乏人の私は、世俗の塵に縛られることはありませんから」の意になろう。一方、見せ消ち前の草稿では、「私が貧乏なことを心配しないでください。貧乏な時が幸せなのですから」の意になろう（「休憂」の係る範囲が変わる）。そして、この草稿は、前の詩の結句「多事従茲始」（厄介なことはこれから始まる）に対応するものと言えよう。つまり、草稿では、これまで貧乏でこもっていた履軒が、世の中に出て出世することを暗示するものであるのに対し、定稿では、初めから出世することがないという言い方に変えられているのである。後者は、京都行の後の「答早士誉」に「豈是貧寵栄」（貧乏人がどうして恩寵に浴しよう）と言い、一年後の帰阪時に詠んだ「南帰途中口号」に「一揖京洛塵、未化旧素衣」（一度、京都の塵を払うと、白い衣は元のままだ）というのと同様、結果を見てからの視点で書かれてい

ることがわかる。履軒も出立時には、出世を意識していたが、後にはそれを隠したと言えるかもしれない。

八、

五三頁　英輔→永輔

（cf.『履軒古風』手稿本では「早原二生」）

五三頁　「牘背」の「牘」の横に「簡」とある→簡背

五三頁　「遠相贈」とあり「遠」の横に「並」とある

→並相贈

一〇、

五五頁　「朝飲」とあり「朝」の横に「晨」とある→朝飲

五五頁　紫霓→紫電

五五頁　汨揺々→汨蕩々

十五、

六〇頁　「肱」は「鈎」（?）を改める→肱曲

十八、

六二頁　「朽廃姿」とあり「姿」の横に「躯」とある

→朽廃姿

六二頁　驩未洽→歓未洽

二十一、

六六頁　「中之与晷」とあり「晷」（＊「晷」は日陰の意）を消して「昃」とある（『洛晷奚囊』も同じ）→中之与昃

二十四、

六九頁　「葱根」とあり横に「蘘花」とある→蘘花

六九頁　至小者→至少者

二十五、

七〇頁　忘朝饑→忘朝餓

二十七、

七一頁　「独鶴」とあり「独」の横に「別」とある

→別鶴

【ない作品】

八と九の間

研室*銘　代菅公（研室の銘、菅公に代わる）

玄々*之室　　玄々の室に

伏彼秋兎*　　彼の秋兎を伏す

儻遭風雨　　儻（もし）風雨に遭えば

化作龍蛇　　化して龍蛇と作（な）る

【注】○研室…硯箱。○玄々…奥深い様。『老子』第一章の「玄之又玄、衆妙之門」が有名。○秋兎…秋の毛は細いと言う。その秋の兎を使った筆を言うか。

【訳】奥深い部屋（＊硯箱）に、あの秋の兎（＊筆）が潜んでいる。
もし、風雨（＊墨汁）に遭うと、化して龍や蛇（＊字）になる。

【参考】硯箱、硯を詠んだ履軒のその他の詩

研室銘（新田文庫『履軒古風』（E138））
（次の「寄長洲」は辛卯（明八年・一七七一）孟春の作）

我之無能　我れ之れ無能にして
惟其有容　惟だ其れ容るる有り
鈍鋭殊質　鈍鋭 質を殊にし
並受待用　並びに待用を受く
狡兎之林　狡兎の林となり
龍蛇之淵　龍蛇の淵となる

【訳】私は能なしで、物を容れることしかできません。優れたものと劣ったものとはもとより性質を異にしますが、それぞれ使われ方があります。すばしこい兎（＊筆のこと？）の林となり、龍や蛇（＊字を喩える？）が棲む淵となります。

研銘（『履軒古風』巻四）

窮谷之材　窮谷の材
隠見有期　隠見 期有り
爾性已鑿　爾の性 已に鑿たれ
爾用方施　爾の用 方に施されんとす

【訳】奥深い谷の材が、隠れたり現れたりするのはそれぞれ時期がある。
お前の質はすでに鑿たれて、これから用をなそうとしている。

十七と十八の間

泉家石地炉銘

彼洛之水　彼の洛の水
有沔其支　沔ぎるあり　其の支
遭運之利　遭運の利
万民攸倚　万民倚る攸
泉家之荘　泉家の荘

在東之涯　東の涯てに在り
乃祖莵裘　乃ち祖莵裘
孫子敬止　孫子敬止し
修其壊弊　其の壊弊を修む
獲其玄器　其の玄器を獲り
四周無縫　四周縫無く
廓然虚矣　廓然として虚なり
無蓋無底　蓋無く底無く
類井之幹　井の幹に類す
先世旧物　先世の旧物
覩斯有感　斯れを覩て感有り
就作地炉　就ち地炉を作り
以供烹餌　以て烹餌に供し
以示弗忘　以て忘れざるを示す
永貽厥孫　永く厥の孫に貽し
育斎処士　育斎処士
孝思攸覃　孝思　覃（およぶ？ふかい？）攸
属銘其友　銘を其の友
履軒幽人　履軒幽人に属す
時属孟夏　時　孟夏
明和四年　明和四年に属す

【校勘】○属…「在」を改める。

二十一と二十二の間

離恨（略）：『履軒古風』もあり。

二十七と二十八の間

読王祥*伝（王祥伝を読む）：『履軒古風』もあり。

淳徳一代望　淳徳　一代望み
孝友継虞汭*　孝友　虞汭を継ぐ
奈何馬食槽　奈何せん　馬食の槽
可惜風吹耳　惜むべし　風の耳を吹くを
揖譲労文飾　揖譲は　文飾を労し
栄華没年歯　栄華に　年歯を没す
古人言*忠臣　古人言う　忠臣は
須求之孝子　須く之を孝子に求めよ、と
此語徒虚辞　此の語　徒らに虚辞にして
掩巻為君慨　巻を掩いて君が為に慨く

【注】○王祥…『晋書』に伝がある。晋の人。冬、母のために鯉を捕ろうとした時、氷が自然に割れて鯉を得たという話がある。二十四孝の一つ。○虞汭…『史記』周紀に、礼を尊んだ土地として登場する。○古人言（以下）…

『戦国策』巻一九「王立周紹為傅」（王 周紹を立て傅と為す）に、趙王の言として「人有言子者曰、『父之孝子、君之忠臣』」（人 子を言う者有りて曰く『父の孝子は、君の忠臣なり』と）とある。この故事に基づく「孝詩」という詩にも「欲得忠臣者、求之孝子門」（忠臣を得んと欲する者は、之を孝子の門に求めよ）とある。

【訳】〔王祥の〕淳き徳は世の中こぞって仰ぎ、その孝行と友情は虞汭を継承するものであった。
だが、どうしよう、大食らいの桶〔のような食器〕を。また、惜しむべし、〔礼儀など〕どこ吹く風という態度を。（？）
礼儀は表面を取り繕い、栄華の中に天寿を全うした。
古の人（＊『戦国策』に見える趙王）は「忠臣は孝子に求めよ」と言った。
この語はいたずらに空語となっている。本を閉じて君のために嘆く。

【参考】王祥は、魏に仕えながら、司馬氏の晋に仕え、高官の地位で天寿を全うした。孝行だが、魏には忠臣ではなかった。末尾は、「忠臣は孝子にもとめよ」との格言は、王祥の生涯を見れば、虚言だ、嘆かわしい、と言うのであろう。孝行という徳行と現世での栄達とは両立しないという履軒の考えを反映するのかもしれない。

帰省浪華飲黒田氏宅、時季秋閏之晦也
（浪華に帰省し黒田氏宅に飲む、時 季秋閏の晦なり）

秋尽気蕭森＊　秋は尽き　気は蕭森たり
高堂杯盤羅　高堂に　杯盤羅なる
歓極生愁思　歓極まりて　愁思生じ
不謂三旬多　三旬も多しと謂わず

【注】○蕭森…物寂しい様。

【訳】秋は終わり、物寂しさが広がる。お屋敷には杯や皿が敷き並べられている。
歓楽が極まって愁いが生じ、三十日も多いと思わない（閏の月がいつもより早く尽きて帰らなければならないことを歎くか？）。

同前　醉中揮筆（醉中に筆を揮う）

揮筆走龍蛇　筆を揮いて龍蛇を走らせ
吾復何所讓　吾れ復た何をか讓る所ならんや。
醉墨題醉語　醉墨にて醉語を題し

因酔見吾狂　　酔に因りて吾が狂を見す。

【訳】筆を揮って龍や蛇のような字を走らせ、私はもはや遠慮などせぬ。
酔っぱらった筆で酔っぱらいの言葉をしたため、酔いに乗じて我が狂なる部分を見せよう。

同前　賡*竹里子*国詩韻（竹里子が国詩の韻に賡ぐ）

吾党不羈才　　吾党 不羈の才
文酒気雄哉　　文酒 気雄きかな
徒長燕市*傲　　徒らに燕市の傲りを長じ
使人感慨催　　人をして感慨を催さしむ

【注】○賡…つぐ。「賡韻」は「和韻」に同じ。○竹里子…加藤景範。懐徳堂で学んだ歌人。○燕市…燕の都。刺客として有名な荊軻は、酒を好み、ここで日々酒を飲んだと言う（『史記』荊軻伝）。

【訳】我らは、束縛を受けない才人だ。詩文を作り酒を飲み気は猛々しい。
いたずらに酒飲みの倨傲だけを長じ、人をあきれさせる。
＊やや自暴自棄な詩である。京都でのストレスを一気に発散させたか。

離恨（離れの恨み）

瞻彼北山　　彼の北山を瞻
発我南音*　　我が南音を発す。
清商入徵*　　清商 徵に入り
凄惋動人　　凄惋 人を動かす。
有客問我　　客有り我に問う
何為乎然　　何為れぞ然るや、と。
人鮮兄弟　　人 兄弟鮮なく
他郷離散　　他郷に離散す。
素秋将央　　素秋 将に央きんとし
草木且変　　草木 且に変ぜんとす。
霧露侵体　　霧露 体を侵し
思夢煩襟　　思夢 襟を煩す。
匪飢匪渇*　　飢えず渇せざるも
伏枕輾転　　枕に伏して輾転す。
何日斂翼　　何れの日か翼を斂むること
于彼旧林　　彼の旧林においてせん

【注】○南音…南の音楽。○清商入徵…商徵ともに古代中国の音階。○匪飢匪渇…『詩経』「小雅」「甫田之什」

「車獗（しゃかつ）」に見える。

【訳】あの北山を見て、我が南の音楽を奏でる。調べは短調へと変わり、その凄まじさは人を動かす。ある人が私に尋ねた。「どうしてこのようなのですか」と。〔私は答える〕「それでなくても兄弟が少ないのに、他郷に離散しているのです」と。秋はまさに尽きようとし、草木はまさに色褪せようとしている。露が体を侵し、悩ましき夢が心を痛める。飢えも渇しもしていないが、枕に伏せて寝返りを繰り返す。いつになったら、あの故郷の林で翼を休めることができるのだろう。